communication

コミュニケーション編

KANAGAWA CASE BOOK

子ども・若者の居場所づくり事例集

2018

目　次

communication
コミュニケーション編

01 鯛ヶ崎公園プレイパーク　横浜市港北区 …… p6

02 自主夜間中学 あつぎえんぴつの会　厚木市 …… p8

03 子どもと共に歩むフリースペース たんぽぽ　横浜市鶴見区 …… p10

04 相模原無料塾　相模原市中央区・緑区 …… p12

05 地域食堂 めさみーる＋ メサ・グランデ　川崎市中原区 …… p14

06 ずし子ども０円食堂　逗子市 …… p17

07 就労支援センター 働楽（はたらっく）　横浜市中区 …… p20

08 ゆがわらっことつくる 多世代の居場所　足利下郡湯河原町 …… p23

09 コミュニティスペース SHIP にじいろキャビン　横浜市神奈川区 …… p26

10 川崎市ふれあい館　川崎市川崎区 …… p28

11 NPO インターンシップ 横浜サンタプロジェクト　横浜市中区 …… p32

発行に寄せて

子ども・若者の居場所づくり事例集、第 2 号制作にあたり、
県内 12 ヵ所の子ども・若者の居場所を訪れ、お話を伺った。
第 1 号事例集の居場所と併せると 23 ヵ所になる。

居場所は、実にさまざまな場所にある。
小さな会議室、自治会の集会所、コミュニティカフェ、
マンションの一室、学校の校庭、町の公園、里山…
どんな場所でも、子どもや若者、地域の大人たちは
それらを自分たちの正に「居場所」にしていた。
固有の用途、地理的特性、一見居場所になるのかと思えるような場でも
その場の特性を活かして、個性豊かな居場所としている。

一方、豊かな居場所の共通性にも気づく。
「コミュニケーション」だ。
生き生きとしている居場所にきまってあるもの。
子ども同士が、子どもと大人が、
自由に、時に真剣に、時に思いっきり楽しく、対話をしているのだ。

子どもや若者、いや、大人たちにとっても、価値ある居場所とは
物理的な確保だけではない
無形のコミュニケーション・対話が、場を生みだす。
改めて、それを確信する。

取材中、幾人かのボランティアの方々が話してくれた。
子ども達のために…と思って立ち上げた活動
だけど、実際始めてみると、子どもとどんなふうに向き合うのか
声掛けのタイミングさえ見つからず悩んだ。
ボランティア達は、改めて、子どもや若者と共にあゆみ
子どもや若者と共に語り合うことを求めた。
その結果が、豊かな居場所に存在する。

「居場所でのコミュニケーション」で、
どれだけの子どもや若者が孤独から救われただろう
どれだけの子どもや若者が人と共にある楽しさを実感しただろう
どれだけの子どもや若者が夢を見つけられただろう

発行にあたり

「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」

（福）神奈川県社会福祉協議会は、平成 28 年度より 4 カ年の活動推進計画に「子ども・若者の育ちや自立を支える協働事業」を位置付けました。この事業は、（福）神奈川県社会福祉協議会、（福）神奈川県共同募金会、（N）よこはま地域福祉研究センターの 3 者協働により、それぞれの持ち味を生かした事業展開を目指しています。

今回「子ども・若者の居場所づくり事例集」は、既に県内で行われている、子ども・若者の育ちや自立を支える多様な「居場所」を取材し、発足の経緯や活動内容を紹介し、居場所の有用性や居場所のあり方を検討するきっかけに、また、今後、身近な地域にさらに増えていくことが期待される居場所に関わる人が現れることを願って発行します。

紹介事例について

第２号「子ども・若者の居場所づくり事例集」で紹介する取り組みは、第１号と同様１１事例。居場所でのコミュニケーションにも視点をおいてインタビューしました。

また、今号の特徴は、５つの学習支援を行う居場所を取り上げたこと。就労支援に関しては、中学生から高齢者までを対象に、複数の仕事体験の場を支援する取り組みの紹介。若者支援では、若者たちが自ら企画して社会貢献的活動を実践する取り組みなど、新しい発想の取り組みを多数紹介しています。是非、ご覧いただきたいと思います。

各事例の表し方としては、本文の他、第１号と同様、指標①「活動の自己評価」と指標②「活動のプロセス」（表記のない事例もあります）を使いました。

※各事例は 2018 年 6 月から 9 月にかけ取材した時点の内容です。

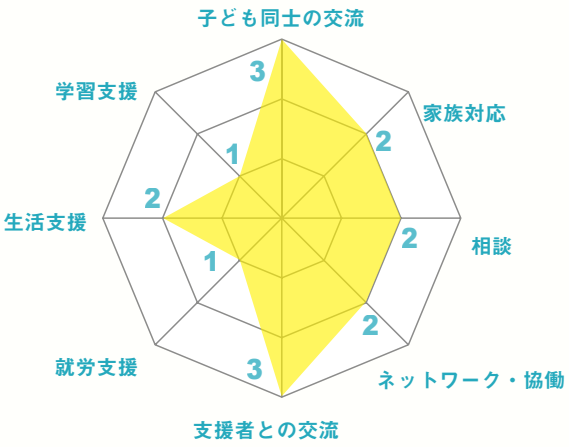
各事例に標記している指標について

指標①：活動の自己評価

取材をする中で見えてきたのは、各居場所を運営する団体では、子ども・若者、また、その家族に対して行っている主な取り組みの他にも、見えてきた課題に応じて活動の内容を広げている場合が多いことです。そのため、文中に紹介するだけでなく、「居場所の取り組み指標」を考え、8 つの項目を立て、それぞれ実施度を 0 ～ 3 までの 4 段階にして、活動団体に自己評価していただきました。居場所とは、そこにいる人々の間で、「暮らしを共有」する場でもあり、関わりの中で支援の必要性が生まれたり、それを実行するために外部とのネットワークが広がっていることが分かります。

指標やその項目については、本事例集を編集する段階で考えたものです。より明確に居場所の実態を表す指標が考えられる場合、必要に応じて変更したいと思います。

活動の自己評価



指標②：活動のプロセス

今日の社会で、子ども・若者の育ちや自立を阻む課題がさまざまある中で、居場所を開設した個人や組織は、一様に、その多様な課題に現状把握という形で向き合い、地域における対策の実際などの情報を収集し、具体的な活動を生みだし、実行する中で、独自性のある活動をさらに生みだし、成果を出そうとしています。そして、最終的には、地域社会の課題を改善させたり軽減させることまでをも行っています。

本指標については、取材者がヒアリングをし、行われていることを表に書き出す方法を取りました。現状認識やプロセス上の効果把握等、団体の視点や活動展開の違いに注目してほしいと思います。

リーダーにフォーカスしたインタビューによる記事

本事例集は、いずれの事例もリーダーに取材申し込みをして聞き取りを行った上での記事です。

「居場所」を運営する団体のリーダーが、どのように今日の社会や地域を、また、子どもや若者を見ているのか。また、どのような取り組みを選択し、どのようなチームを形成して取り組みを行っているのか、できるだけ具体的に表すことを試みました。

種別について

取材をしていく中で、複数の要素をもった「居場所」があることが分かりました。明確に分類することは難しいのですが、各活動を分かりやすく伝えるため、下記の 10 に分類しアイコンとして表示しています。

プレイパーク　多世代交流

01

地域で子育てをする仲間をつくる
鯛ヶ崎公園プレイパーク

横浜市港北区

鯛ヶ崎公園プレイパーク　副代表

key person

山口　園子さん（69歳）

森で遊んでいた仲間たちの思いが、プレイパークに

「プレイパークは、誰でも自由に遊べて、楽しい時間が過ごせる場所です。」プレイパークでは、四季折々の自然の中で、水や泥、草や木等の素材を使って遊んだり、ハンモック、工作、たき火等で遊ぶことが出来ます。

25 年前、自然いっぱいの「みのわの森」（現・日吉の丘公園）で、月１回、自然の中で遊ぶのが好きな人たちが集って遊んでいるうちに、もっと身近な場所に遊び場が欲しいと、新設されたばかりの鯛ヶ崎公園でプレイパークを始めることになりました。

月１回から始まり週１回と開催日もだんだん増やしていく中で、横浜でプレイパーク活動を始めたいくつかの団体といっしょに、2006（平成 18）年ＹＰＣネット（ＮＰＯ法人横浜にプレイパークを創ろうネットワーク）を設立、団体会員となりました。現在、常設プレイパークとして週４回開催、プレイリーダー２名が配置されています。今、横浜市内には、25 ヵ所のプレイパークが活動中です。

地域と鯛ヶ崎公園プレイパークの繋がり

鯛ヶ崎公園が学校の遠足や校外学習等で活用されるようになり、プレイパーク開催中にも利用されて、近隣小中学校とも繋がりを持つようになって来ました。

プレイパークを支えているスタッフには、子育て中の人の他、横浜市の子育て支援者や教師、学童保育指導員もいます。中には地域の小中学校でＰＴＡ役員をする人も多くいます。地域活動を通して学校の先生方と話す機会も多く、地域の子どもを支えていくために、学校とプレイパークが必要に応じて情報交換をするなど、自然な流れが出来ました。

新人プレイリーダーの
渡邊 星矢さん（通称：おかき）

また、学校の他に、町内会や子育て関連施設等と関係が出来、地域とのネットワークも進みました。

プレイパークでは、午前中は乳幼児が多く、近隣保育園がお散歩コースとして利用したり、近くの親子連れものんびり遊びに来ています。お昼は、幼稚園の親子が来園、青空ランチを楽しんでます。午後になると小学生、夕方からは中高生がやってきます。小学校高学年や中高生になってやって来る子たちは、大人との緩い関わりが心地よい子、小さい子どもとの関係を楽しむ子、プレイリーダーに魅力を感じている子などいろいろです。プレイパークでの人のつながりやいろいろな体験を通して「オレ、意外と小さい子好き」なんていう子もいたりします。日常生活に失われつつあるタテの関係が、子どもの気持ちをやさしくしてくれるようなこともあるのかもしれません。

豊かなコミュニケーションのために「聴く」ことが大切

プレイパークでは、子どもたちに思い思いの遊びを存分にしてほしいと願っています。大人は、子どもといっしょに遊んだり、子どもを見守ったり、さりげなく寄り添うことが役割だと思います。そんな雰囲気が子どもの気持ちをほぐし、本音を語ってくれることもあるのです。

プレイパークには、親子連れだけでなく、竹とんぼづくりなど特技がある大人たち、場を支えるお母さんやお父さんたち等々もいます。

いろいろな考え方、見方をする人が集まります。多くを語らなくても、大人たちの個性も子どもたちにはよく見えているのかもしれません。そして、いろいろな人がいることが、居心地の良い、居場所になっているのかなと思います。

PROFILE

中学生の頃、田んぼが広がる日吉本町に家族で越してきて以来、結婚後も暮らし続ける。プレイパークは、4人の我が子の子育て期に隣町のトトロの森のような「みのわの森（現・日吉の丘公園）」で、子育て中のママと子どもたちが遊んだことがきっかけ。仲間の漆原友子さんは、当時からの仲間。鯛が崎公園プレイパークの25年は子どもから大人までの絆を深めている。

様々な人との交流や体験が子どものココロを育てる

私たちがプレイパークをやっていてよかったなぁと思う子どものエピソードのなかに、中学生のA君のことがあります。A君は小学校の頃、中国から父親と来日し、日本語が少ししか話せませんでした。「ダメ！バカ！くれ！」等の単語ばかりで、いつもケンカになっていました。

やがて中学生になってサッカー部に入部、公園でもサッカーをして同年齢の子どもたちとも遊ぶ様になってきました。ある日、プレイパークでジャンボしゃぼん玉をとばして幼児たちに大喜びされてから、ちょっとずつ幼児と関われるようになってきました。今では、会話も増え、将来のことをプレイリーダーに相談するようにもなって来ています。

中嶋 光（ぴかっち）さん　プレイリーダー

プレイリーダー 4年目、その前は保育士をしていました。YPCネットの職員として、鯛ヶ崎公園プレイパークを中心に横浜市内数カ所のプレイパークに携わっています。ここ鯛ヶ崎公園プレイパークは、当初の立ち上げメンバーが現在に至るまで、地域の方と密に関係性を築いていってくれているおかげで、地域の方々に受け入れてもらいながら開催できています。

子ども一人一人に向き合えるのがプレイパークの良いところ。子どもたちが、自分のやりたいことを見つけて、失敗を恐れず挑戦できる環境が、この先も在り続けてほしい。そう思いながら日々来園者と接しています。公園が奥まっているので、入口のスロープにビー玉を転がせるような遊びを仕掛けたり、チョークで道にイラストを描いたりと、初めての人も入って来やすいような雰囲気づくりにも心がけています。

また、横浜市は引越しの多い地域であるため、地域のつながりが薄い中で子育てをしているお母さんにとっても、ホッと一息できる場所になっています。

ここではお母さんたちが程よい距離感で見守っているので、安心して子どもとじっくり向き合えるようです。こういう場が増えて、人の目を気にして疲れてしまうお母さんたちの悩みのハードルを少しでも下げられたらいいですね。

プレイリーダーは青年たちの相談も受けることもありますが、私たちのコトバが全てなのではなく、色んな選択肢があることも伝えたい。ゆくゆくは自分の力で生きていける力を、少しずつ身に付けていってほしいなと思っています。

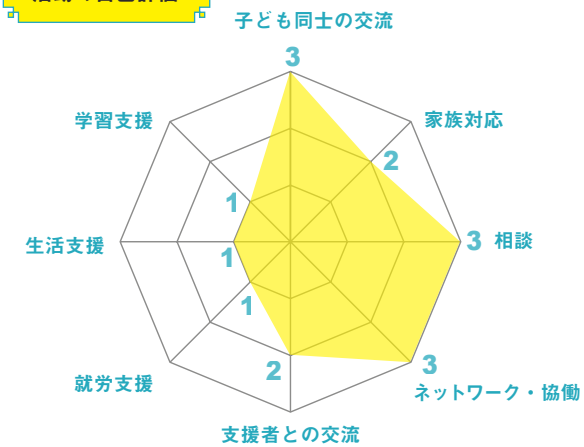
この日は持ち寄りピザづくりを開催。たき火で焼くオリジナルのピザは絶品

参加していたBさん親子

現在3歳の息子が保育園に入る前から来ています。できるだけ親が介入せず、本来、子ども同士が持っている関係性を大事にしたいと思って、公園を色々探していたら、このプレイパークを知り合いから教えてもらいました。

ある日、息子がたき火のバケツをひっくり返してしまったとき、そこにいた大人から「駄目だよ」という言葉ではなく、「こぼしちゃったら、水を入れてきてね」という声掛けをもらい、嬉しかったのを覚えています。子どもたちを主体的に遊ばせることができるし、親としても色々やらせたいのですが、何が危ないか知らなかったので、それをここで教えてもらえた気がします。

活動の自己評価



団体の概要

鯛ヶ崎公園プレイパーク

所在地	横浜市港北区日吉本町5-62
事務局	日吉本町3-37-8　漆原気付
TEL	045-561-8763　山口
WEB	https://www.facebook.com/taigasakipp/
代表者	青　博孝
活動内容	市民と行政が連携して、子ども達の「やりたい」という気持ちや発想を大切にし、自由にのびのびと子ども時代を過ごせる遊び場の運営

開設年月日	1994年／管理運営委員会設立 2006年
活動日	火・水・木曜、第2, 4土曜に続く日曜日
利用定員 /1日	（利用者）定員はなし／100名位
常勤スタッフ	2名
利用料金	無料　※但し実費を取る場合もある
資本金	なし
助成金	横浜市管理運営費 70,000円 地区社協助成金 40,000円

学習支援　多世代交流

学ぶ意欲が作り上げる居場所

02 自主夜間中学 あつぎえんぴつの会

厚木市

岩井　富喜子さん

夜間中学とは？

夜間中学とは、義務教育を未修了となった人や、卒業証書は持っているものの不登校や家庭の事情等によって学びの機会を失った人たち、外国籍の子どもたちなどが、読み書き計算といった基礎的学習などを学び直す場所です。夜間中学には、民間の有志が設立・運営する自主夜間中学と、行政が運営する公立夜間中学があります。

えんぴつの会発足の歩み

1945（昭和 20）年８月に富山大空襲で富山市の自宅と学校が被災し、親の死も重なって中学校未修了者となったひとりの女性（現在 84 歳）が関東に移住。結婚、子育て、仕事と多忙な毎日を送りながらも、教育を受ける機会を失った無念と辛さ、学びたい思いを持ち続けてきました。この女性が退職後に一念発起。学びの場を探し始めたのです。

しかし、川崎などの県内から東京まで、たくさんの夜間中学を見学するなどして学びの場を探しましたが、遠距離等の事情により、入学には至りませんでした。

転機となったのは「学ぶ機会が欲しい」という渇望を知った横浜市鶴見区の自主夜間中学“つるみえんぴつの会”を立ち上げた女性スタッフの存在です。このスタッフが、厚木まで通ってくれることになり、2013（平成 25）年 11 月、“あつぎえんぴつの会（以下、えんぴつの会）”が誕生、月２回の「授業」からスタートしました。

その後、現在の代表である元特別支援学級教諭の私が加わり、スタッフ２人、生徒２人の体制になりました。新聞、広報への記事の掲載、映画上映などによる夜間中学の周知・啓発イベントなどを通して会の存在が知られるにつれ、生徒、ボランティアスタッフが増えてきたところです。

学習はいつからでも始められるもの

“えんぴつの会”には、10 ～ 20 代の若者から 80 代の方まで、幅広い世代の生徒が通います。学びの機会の喪失を経験した人、外国にルーツを持つ若者から不登校経験者、あるいはＬＧＢＴの人など、多様な背景を抱えた人たちが市内からはもちろん、遠くは八王子、世田谷、横浜からも通っています。

夜間中学に分類される“えんぴつの会”ですが、実際は午前中から活動が始まります。週１回の授業では、生徒一人ひとりの希望に応じた学びを、元教員のボランティアスタッフがマンツーマンになってサポートします。ボランティアスタッフの方たちにはそれぞれ専門分野があるので、生徒の学習のニーズなどに応じてマッチングし、基本的には固定のペアで授業を行います。学習を通じて関係性も少しずつ深まり、世間話や趣味の話に花が咲いたり、若い生徒には進路相談などに応じたり、自分で情報を調べる方法などを教えたりすることもあります。

生徒よりもスタッフの人数が多い週がほとんどで、小中学校、高校の教員、大学教授のＯＢも勢ぞろい。サポート体制は充実しています。

多様な学習の意欲に応え続ける

学習は漢字（漢字検定に挑戦する人も）、小学校の算数、英語、ローマ字、日本語、スペイン語、通信制高校、定時制高校の学習、科学、憲法、政治、社会情勢など多岐にわたります。生徒は、会が用意したドリルを使ったり、自分で持ち込んだ本や新聞の切り抜きを教材に使ったりして学んでいます。また、70 ～ 80 代の生徒がボランティアスタッフの持ち込んだタブレット PC で漢字の書き順を調べたり、携帯用のホワイトボードで計算式を確認したり、イラストを用いたプリントで日本語を学んだりと、様々な方法が用いられています。

毎週の授業のほかにも、ハイキング、遠足（動物園）、料理の持ち寄り新年会など、親睦を深めるための行事も開催しており、生徒のほとんどが参加します。

若者にとっての自主夜間中学

フィリピン人の親を持つ 10 代の男性は、県内の公立高校の定時制で勉強をしながら、部活ではバスケットボール部に所属し、学習と運動を両立する日々を過ごしています。高校に行く前に会に通い、英語に対応できるボランティアスタッフからマンツーマンで日本語や、高校の授業の内容、宿題などを丁寧に教わっています。

また、コロンビア国籍の 10 代の女性も在籍しています。８月 19 日には、東京で開催された夜間中学のスピーチ大会に出場しました。たくさんの生徒が会場へかけつけエールを

PROFILE

大学の教育学部を卒業後、厚木市で小学校の教諭に。キャリアを重ねる中で養護教諭の免許も取得し、38 年間にわたって小学校の特別支援学級で子どもたちを教えた。退職後、東日本大震災で被災した故郷・福島の夜間中学へ毎月1、2回のペースで通い、活動に参加して1年ほど経った頃、厚木でも自主夜間中学が始まったことを知り、2014 年2月から会の運営に携わる。現在は代表としてボランティアスタッフをまとめながら、夜間中学の普及・啓発に取り組みつつ、自らも生徒たちの学習、相談に応じている。

携帯用ホワイトボードを使って理解を促す

送る中、見事なスピーチを披露。教室での学習とは一味違う時間を過ごし、学校を超えての世代間の交流が一層深まりました。

ボランティアスタッフも共に学ぶ

算数の図形（角度）の問題を解いていた 30 代の男性。不登校の経験があり、市の窓口で紹介されたことがきっかけでえんぴつの会に通い始めた一人です。2つの直線が交わる図形の角度の計算方法を教えるスタッフに対し、男性は「この図形は中央林間駅」「こっちは下北沢駅」と電車の路面図に例えて答えます。脱線して盛り上がる2人。学習はあまり進んでいないようにも見えながら、スタッフとの関係や教室の居心地の良さを感じさせる一幕でした。自身にはない発想に驚く男性スタッフ。私たちスタッフも授業を通して生徒から刺激を受けています。

ペースに合わせたマンツーマン授業が基本

県央地区にも公立夜間中学を

“えんぴつの会”では、新聞や市の広報への記事の掲載、映画上映などによる夜間中学の周知・啓発イベントなどを通して、市民へ伝える活動にも取り組んでいます。

2017（平成 29）年2月に教育機会確保法が施行され、文部科学省は都道府県へ少なくとも1校の公立夜間中学の設置を目標に掲げています。現在、神奈川県には横浜市（蒔田中）と川崎市（西中原中）に各1校が設置されていますが、県教育委員会が昨年（20017 年）末にかけて実施した「夜間中学ニーズ調査」では、相模原市や厚木市を含む県央地区での設置を望む声が多く聞かれました。

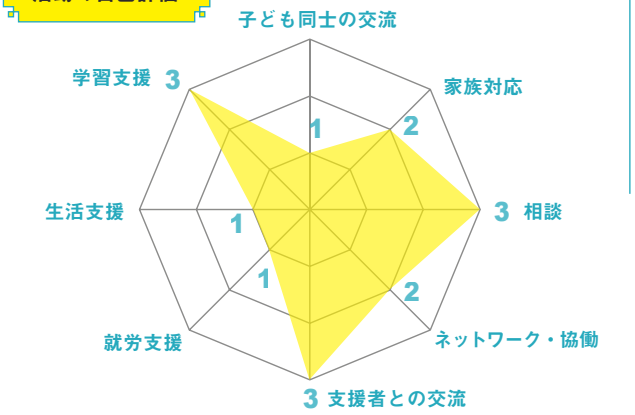
若年層への居場所としての広がりを待つ

学びたいという人たちの意欲が集まり、居場所となっていった“えんぴつの会”。現在は 30 ～ 80 代の生徒が多く在籍していますが、中学校、高校に通う生徒など、今後の若年層への広がりを期待しています。

小中学校、高校で不登校となる児童生徒が少なくない中で、必ずしも学校に戻ることを目指すのが目標ではなく、他の居場所を探すことも選択の一つとして受け入れる社会に少しずつなってきています。

そういった児童生徒たちが学習や支援者との関わりを通して自己肯定感を育み、気軽に立ち寄ることのできるとまり木となれるよう、市のセンターなどに見学の案内・チラシを配架してもらっています。難しさとしては、こちらから招き入れるのではなく、本人が学びたいという意欲を持ち、行ってみようと思ってもらうこと。一度失敗を経験した若者が違う空間へ踏み出そうとするのは、相当な勇気や気力がいるはず。会の存在を広める活動を続けながら、いつでも受け入れる体制を整え、若者からの連絡を待ち続けています。

活動の自己評価



地域の実践者、支援者などがつくった居場所ではなく、厚木市民を中心とした生徒たちの学びたいという意欲によって「0から1」になった居場所であること、若者を含め多世代であること、生徒数を上回る教員・教授OBのボランティアスタッフが学習支援に当たっていることなどが特徴。生徒個々の学びたいテーマやペースとボランティアスタッフの専門分野をマッチングし、マンツーマンを基本に学習支援に取り組んでいる。公立の夜間中学（中学校夜間学級）とは違い、やりたいこと、挑戦したいことを自分たちの考えで、緩やかに実施できるのも魅力の一つ。

団体の概要

自主夜間中学 あつぎえんぴつの会

所在地	厚木市中町 1- 8-11（中町教室）
TEL	090-2238-0837
代表者	岩井　富喜子
活動目的	経歴、性別、国籍、年齢を問わず、学ぶ意欲を持っている人にスタッフが支援し、ともに学び合う
活動内容	読み書き計算などの基礎的学習、日本語等をスタッフとともに学ぶ
開設年月日	2013 年 11 月
活動日	授業は毎週1回（木曜日）10:00 ～ 16:00
登録数	32 名
ボランティア	33 名
利用料金	無料

※平成 30 年8月 23 日現在

相談　たまり場　学習支援

03 不登校の子どもと保護者の交流と学びの場
子どもと共に歩むフリースペース　たんぽぽ

横浜市鶴見区

NPO 法人 たんぽぽ　代表

key person

青島　美千代さん（59歳）

「もう学校に行かなくてもいいよ」

うちの息子は小学校5年生の時、いじめにあい、学校に行かなくなりました。はじめは子ども同士のケンカ程度に思っていましたが、毎朝、玄関で座り込み泣き出すようになり「学校に行く、行かない」のやり取りが大変でした。また、学校からは「毎朝、連絡をください」と言われており、息子とのやり取りの後、欠席の連絡を入れるのですが、これがとても辛かった。なんだか、責められているような気持になったのです。当時の私は、ずっと学校に行かなくなってしまったら…、仕事は休めない…。不安は大きくなるばかりでした。

そんな時、不登校の子どもを持つ“親の会”に出会いました。似た境遇の親子との交流が始まり、泣いたり、笑ったりするうちに、私の追い詰められたような気持ちは薄らぎ「まあいいか」っていう気持ちになれたのです。

ところが、久しぶりに登校した息子が帰宅すると「今日、学校のごみ箱に、僕の給食袋が落ちてたんだ」と言ったのです。給食袋がゴミ箱に捨てられていたと知ったとき、私は、「そんなに我慢しなくてもいい。そんなに辛い思いをしてまで学校に行かなくていい」と強く感じました。そして「もう、学校に行かなくていいよ」と息子に言いました。

不登校の子どもたちが安心してそのままでいられる居場所

交流会を重ねるうちに、家の中で家族と過ごすことが多かった不登校の子どもたちに、友達と過ごせる場所があったら楽しいのではないかと考えるようになりました。

2008（平成20）年5月に親たちが中心になって立ち上げた“子どもと共に歩むフリースペースたんぽぽ”は、子どもたちが安心して、そのままの自分でいられるようにという親たちの思いのこもった居場所です。不登校になった子どもたちは、それぞれ「心の傷」を抱えています。いじめだったり、先生とのやり取りだったり、子どもによって違いますが、それは、悲しいけれど、消すこともできないし、忘れることもできません。でも、安心できる場所、安心できる人がそばにいれば、癒すことはできます。そして、エネルギーを少しずつためて、また、元気に一歩を踏み出すこともできます。そのために、“たんぽぽ”は、友達と一緒におしゃべりしたり、遊んだり、ご飯を食べたり、好きなことができる場所として、子どもたちの声を大切にした運営が進められるようにと続けています。

楽しく食べる・みんなで食べる

“たんぽぽ”では一緒に食べる時間を大切にしています。不登校になって辛い時、子どもは食べられなくなったり、身体の不調を訴えたりします。不安のために多くの子どもが昼夜逆転の不規則な生活になったりもします。

“たんぽぽ”では、開所してすぐ、みんなで楽しくご飯を食べようと食事作りが始まりました。食べたいメニューを考えたり、一緒に食事を作ったりすることで、心も和み、たわいもない会話が弾みます。また、辛かった時のことが話されるのもそんな食事の時でした。

学びたくなったら大いに学ぶ・楽しく学ぶ

“たんぽぽ”は子ども本人の希望を一番大切にしています。勉強も本人がやりたいと思った時に、一緒にやり方を考えています。強制することはありません。“たんぽぽ”に来た子どもたちには、「なぜ勉強するの？」とよく聞かれました。私は、その時、うまく答えられませんでした。子どもたちの言うとおり、現実の勉強は成績やテストのためだと思ったからです。そんな子どもたちの前で、「将来のため」などという答えは、意味を持たないと感じました。でも、また、元気になって、学びたい時には、一緒に考え学習を進めてくれる元教員の方や工作教室などを行ってくれるスタッフが“たんぽぽ”にはいます。

工作教室では、皆でいろいろな表現を楽しんでいます。例えば「フィギュア作り」では、自分のなりたい姿を紙粘土で作りました。自由に自分らしく表現活動をすることで、仲間や周りの大人との会話も広がっていきます。

自分からやりたいと思う気持ち、自由に楽しく表現したいと思う気持ちを大事にして制作することで、自信を持つようにもなってきました。

自分たちで考える・自分たちで実施する

“たんぽぽ”では、来る時間、帰る時間、持ち物、企画に参加するかしないかも自由、子どもたちが自分で考えて決めることを大切にしています。

また、年齢の違う子ども同士、意見の違いもあったりしますが、やりたい事やお昼のメニューなど、毎月の予定を子ども会議で決めます。私たち大人は、それぞれの子どもたちがやりたいことを応援していきたいと思っています。2017（平成29）年には、自主的に活動する「わたげの会」もスタートしました。ゲームやパーティ、カラオケ、お楽しみ会などいろいろな交流をしています。

PROFILE

横浜市内で学童クラブの指導員をしていた時、５年生の長男が不登校になり、５歳違いの長女も学校に行きたがらなくなる。そんな時、同じ境遇の親たちと出会い、2008年５月、「子どもと共に歩むフリースペースたんぽぽ」を立ち上げ、2014年NPO法人化。応援してくれる人たちに支えられ、今年で10年目を迎える。

「未来の自分」
17歳女子学生の作品

たんぽぽが直面する課題

保護者との関係

最近は、インターネットを使って、不登校に関する多様な情報を検索できるようになりました。不登校の原因が子どもの病気や発達障害であることも紹介され、受診や精神科の薬を服用する子どもも増えています。不登校の原因は何か、何とか改善策を見出したい、そんな保護者の想いが、こうした情報に答えを見出そうとする気持ちはわかります。けれど、不登校の子どもと共にいて、一番大切なことは、大人である私たちも不安な気持ちを持ちつつも、子どもに寄り添い、子どもと共に歩む道を見出すことだと思います。それが、我が子を信じることでもあり、守るということでもあると思います。

子どもも親も一人では辛い。だから、一緒に学び、交流する中で成長していく場が必要なのだと思います。たんぽぽの相談では、すぐに答えは見つからないけれど、一緒に考えていく、そんな活動を皆で続けていきたいです。

子どもと若者の居場所になったたんぽぽ

設立当初は10歳前後だった子どもが、今では20歳を過ぎる歳になっています。小学校や中学校にあまり通った経験がない上に、親や友達、地域との関係性にも変化が生じてきます。10年経っても、子どもの意思で“たんぽぽ”に通い続ける若者がいます。引き続き、その若者たちの気持ちに寄り添い、この社会の中でともに生きていく方法を見いだせる活動に発展することが、団体としての課題の一つだと思います。仕事をするための知識や情報を身に着けるための相談や、インターンシップのような働く経験をするための相談対応なども必要だと感じています。

居場所の運営

設立当初、利用者は小学生や中学生で、親も悩みを抱えて一緒に“たんぽぽ”に来ており、利用料を皆から集めることができていました。子どもが大きくなるにつれ、親が関わらなくなったり、子どもが自分で利用料を支払うようになったり。徐々に利用料が払えない子が増えてきて、結局利用料も含めた収入は年々減少し、今では家賃を払うのがやっとの経営状況となっています。一人ひとりの子どもの状況に寄り添って支援をしていますが、自分も含め、スタッフは手弁当。「想い」だけでなんとか継続しています。人員も含め次の世代への継続ができるのか、大きな課題です。

子どもの育ちと自立を社会全体で考え、取り組む必要性

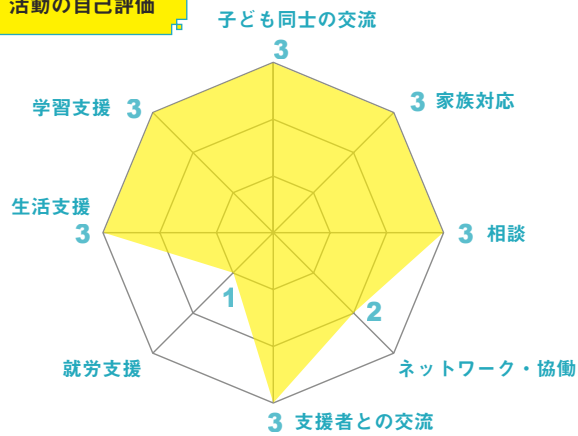
すべての子どもにとって、頼る人、相談できる人が必要です。家族に限らず、社会の大人が子どもたちに関心を持ち、困った子どもが相談ごとをつぶやけるような、寄り添う社会であることが大切だと思います。子どもたちには、ありのままの自分を受け入れ、自信を持ち、自分で決めることができる子どもになって欲しいと思っています。

不登校の子どもが増えるのは、学校の体質、構造的な問題も大きく影響していると思っています。学校も含め、社会もかわらないと、傷つく子どもは今後も増えるのではないでしょうか。

冊子の発行

2017年、神奈川県のボランタリー活動推進基金21の助成金を受けて「不登校と子どもの権利」「子どもと精神医療の実態」の２冊の冊子を制作することができました。「不登校は命の非常口」、子どもの命が何よりも大切というメッセージが届くことを願っています。

活動の自己評価



団体の概要

フリースペース　たんぽぽ

所在地	横浜市鶴見区佃野町1-7　深谷ビル202
TEL	045-834-7970
WEB	http://www.freespace-tanpopo.com/
代表者	青島　美千代
開設年月日	2008年５月（NPO法人への移行2014年５月）
活動日	月・火・金10:30～17:00　木13:00～17:00
利用者数	約20名
利用者の年齢	小学生～30歳位まで※現在は、高校生～30歳が中心
担い手	不特定　※中心スタッフはボランティア３名
利用料金	月額18,000円（週４日） 昼食おやつ代4,500円/月 ※利用料の規定はあるが、実際は利用日数や家庭状況など含め利用者や保護者と相談して決めている
運営資金	会費、参加費、助成金、寄付金
助成金	横浜市鶴見区社会福祉協議会、かながわボランタリー活動推進基金21、鶴見法人会、パルシステムかながわゆめコープ かながわ生き活き市民基金など
協力・関係機関	子ども相談室「モモの部屋」など他の地域の親の会

学習支援

04 無料塾には、成長と夢がある 相模原無料塾

相模原市中央区・緑区

Key person

淵野辺つばめ塾　代表

小宮　位之さん（41歳）

PROFILE

東京都生まれ。國學院大學文学部史学科卒業後４年間の私立高校の非常勤講師（地理歴史）を経て、映像制作の仕事に転職。2012年９月八王子つばめ塾を立ち上げ、事務局長として運営を始める。現在は私立高校の非常勤講師。2013年10月28日NPO法人 八王子つばめ塾理事長に就任。

無料塾とは？

近年、日本では、子どもの貧困が問題視されています。勉強がしたくても家庭での学習環境が整っていなかったり、経済的事情で塾に通うことができず、充実した教育が受けられない子どもがいます。そのような子どもたちが勉強できる場所として全国に「無料塾」があります。貧困と学歴は密接な関係があり、子どもの自立を阻むことも懸念される中で、ボランティア団体・大学生・元教師など地域のボランティアによって無料塾は運営されています。

淵野辺つばめ塾

つばめ塾誕生！

私自身、都営団地在住で経済的に苦しい家庭で育ち、高校３年からは奨学金を利用、大学進学は祖父母が学費を工面してくれました。社会科の教師になりたかったが就職氷河期で非常勤講師になりました。転職し映像制作の仕事をしていた時に東日本大震災の取材に携わったことで、「自分はこのままで良いのか？自分にできることはないのか？」と考えるようになりました。そんな時、2011（平成23）年に学習ボランティアをインターネットで探していたところ、国分寺の無料塾がヒット。子どもたちのためにこんな学習環境が作れるんだ！と目からウロコでした。

しばらくして妻の実家が所有している八王子の学生寮が撤退し、残されていた机・ホワイトボードを眺めていたら、ふと無料塾を思い出し「これだけあれば自分でできる！」と八王子つばめ塾を立ち上げました。講師は自分一人、生徒募集しても来ません。そのうち紹介で中学生が一人だけ来ました。それからボランティアが集まり始めて半年くらいでマネジメントだけやるようになりました。

淵野辺つばめ塾は、最初カキザワ工務店さんから「モデルルームを無料塾の会場に使わないか」と連絡があり、同時期に、近所の方から「ぜひ無料塾をやりたいが平日は難しく日曜日ならできる」との話があり、とんとん拍子に進み、淵野辺つばめ塾を開設しました。カキザワ工務店さんは駅から少し距離があるので、通学しやすい駅近くの公民館で水曜日にも始めました。行政の支援や助成金は一切使いません。助成金等を使うと制約されてしまうので、全て企業や個人の寄付で運営しています。

どんな人がどのように勉強を教えているのか

無料塾の講師は勉強が好きで教えるのが好き、なおかつ熱意がある人じゃないと講師になりません。授業や立案に関してはボランティア講師に任せており、その子に合わせて成績を伸ばすためにベストを尽くして欲しいのでマニュアルは無く、こうやってくださいということはないです。社会人講師と大学生講師の指導の仕方が違いますが、色んな人がいることが良いと思ってます。

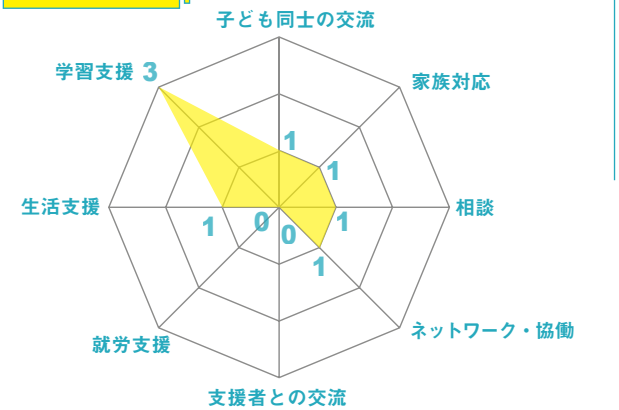
教える側になった子どもたち

今年は４人のつばめ塾生が全員希望の公立高校に合格して卒業しました。八王子つばめ塾の卒業生は大学生になり、子どもに教えたいと戻ってきてくれました。本当に嬉しかった。こういうことが無料塾の一番の成果だと思います。つばめ塾のネーミングは、巣に戻って来るという意味も込めて付けました。無料塾には、「成長と夢がある」。改めて、そう感じます。こんなに嬉しく楽しいことはないです。

一人でも多くの子どもに学びを！

どの子にも平等に同じスタートラインに立ってもらいたい。一人でも多くの子どもに勉強させたい。子どもたちにとって、つばめ塾が一つの光でありたい。その思いがぶれることはありません。そのためにも、各地で無料塾をやりたいという人にノウハウを伝えるため、無料塾の講演やシンポジウムなども行っています。いつか、寄付金で集まったお金を奨学金にしたいと考えています。政府のお金がうまく回らないのであれば民間で回せばいい。お金の心配なく勉強できる環境を作りたいと思っています。

活動の自己評価



相模原みのり塾　代表

key person

PROFILE

大阪府生まれ。半導体メモリの開発をやっていた元エンジニア。八王子つばめ塾でボランティア講師を務めつつ、小宮さんから運営ノウハウを学ぶ。現在は理科実習助手として県立高校に勤務し、休日に無料塾を開催。

小布施　実穂子さん（49 歳）

相模原みのり塾

相模原に無料塾を作りたい

自分の子どもが大きくなり時間ができたので、学習支援ボランティアをやろうと思い立ち八王子つばめ塾で理科と数学の講師を 2 年半担当しました。そこで都立入試問題に取り組みながら、ふとなぜ自分は地元の相模原の子どもたちではなく、わざわざ東京都の子どもたちに勉強を教えているのだろう、と気になり始め、相模原に無料塾がないなら作ろうと思い、みのり塾を始めました。講師としてかかわった経験を活かしながらも、今は塾の運営側にまわり、通ってくる子どもたちに声をかけるのが私の役割です。

あくまで、生徒たちの学力向上のために

学習支援を通して、子どもに関心がない、勉強に関心がないなど保護者の問題が見えてくることもあります。塾に行かせれば成績が上がると思っている保護者もいて、そういったクレームが来ることも。保護者は辛さや不安を吐き出すところが無いのかもしれません。

でも、みのり塾は困窮世帯の支援や生活を指導する場ではないので、敢えて家庭には介入しません。親の同意は必要ですが、「子ども自身が学力面で困っている、なんとかしたい」と思っていることが入塾条件です。子どもたちの色々なバックグラウンドに配慮はしますが、あくまで一人一人の学力向上が目的なので、教室に来れば学習に向かうような環境となるよう、1対1の個別指導スタイルで実施しています。

勉強した成果を確認する「学習成果シート」

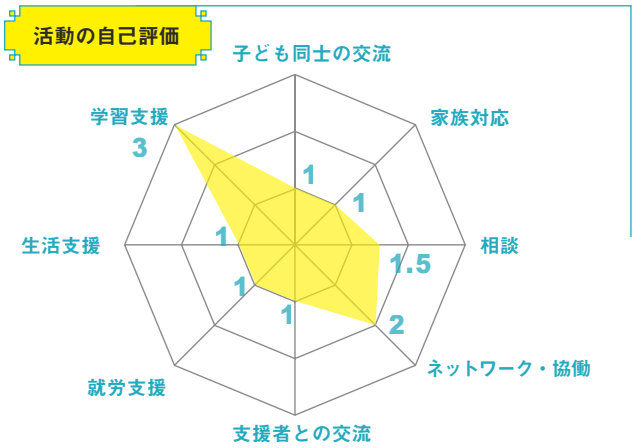
ここに来る多くは、学習環境が乏しいまま中学生になった生徒たちです。なので、宿題をやってきたとか、少しでもできるようになったら褒めてくださいねと、講師にお願いしています。また、生徒たちが自分の頑張りを自己評価する「学習成果シート」を作成して使っています。定期テストが終わったら、生徒自身が自分の点数と「できたところ・できなかったところ」を書き出して、講師と情報を共有し、ほめる励ますきっかけになるようにしています。

組織的な活動を支えるルール作り

みのり塾は法人の形態をとっていませんが、設立時から規約等を作り、個人情報の管理の仕方や守ってほしい内容を明確に示すようにしています。また、総会や会計報告も、関わってくださる方への情報公開のために欠かせないと考えて実施しています。やりたい人が集まってスタートした小さい団体ですが、無料塾は子どもたちが主役。運営がうまくいかなくなってやめてしまうと、困るのは子どもたちなので、団体活動を継続していくために最低限必要なことは何なのかを、生徒にも講師にもきちんと示すことが重要だと考えました。

信頼形成のために欠かせない情報管理システム

運営していく中で一番気を使っているのが、生徒の個人情報の取り扱いです。企業でもお金をかけて対策しているところが多くみられます。しかし、専用のサーバを借りるとお金がかかります。資金の乏しい無料塾。できるだけお金をかけないで生徒情報を守るため、無料の Web アプリを利用しつつも、記述の仕方を工夫したり、暗号のようなものを使ったりして対応しています。また、講師が活動しやすくなるように講師の出欠入力や時間割の調整なども全員で確認できる仕組みを導入しています。



学習支援を通して、子どもたちの背景の問題にも間接的に対応している。また生徒募集は社会福祉協議会に広報協力を依頼。会場の公民館とのつながりも活用している。

団体の概要

淵野辺つばめ塾

所在地	カキザワ工務店内 / 大野北公民館を借用
WEB	https://fuchinobe.hachiojiswallow.com/
代表者	小宮　位之
活動内容	経済的に苦しい家庭の子どもに無料で学習支援を行う
開設年月日	2017 年 3 月 5 日
活動日	毎週日曜（カキザワ工務店）水曜（大野北公民館）
利用定員	16 名 /1 日
登録数	16 名
ボランティア	10 名
資本金	なし / 全て寄付金

相模原みのり塾

所在地	橋本公民館（会場）
WEB	https://sagamihara-minori.jimdo.com/
代表者	小布施　実穂子
活動内容	経済的理由により有料の塾に通えない子どもたち向けの無料での学習支援、教材の配布など
開設年月日	2016 年 5 月 1 日
活動日	毎週日曜日 13：30 ～ 17：30
登録数	35 名
ボランティア	50 名
利用料金	無料
資本金	助成金、寄付金

地域交流　多世代交流

05

「場」と「人」の力でコミュニケーションを促進

地域食堂　めさみーる＋メサ・グランデ

川崎市中原区

NPO 法人 ぐらすかわさき 事務局

key person

大澤　洋子さん（46 歳）

私の子育て経験から

40 年以上川崎に在住。シングルマザーとして育てた娘は今年 21 歳になり、短大を卒業し自立の一歩を踏み出しており、子育てもそろそろ一段落と思っています。私は、電話オペレーターとして長年フルタイムで働きながら子育てをしていたので、親のいない放課後、娘は民間の学童保育に通っていました。学童には娘はとても楽しく通っていましたし、私の家族の協力もあり、母子とも社会的な孤立をすることなく恵まれた子育てだったと思います。しかし地域には、なんのサポートもなく子育てと仕事に追われ時間のない親、自宅で一人で留守番している子どもなど、孤立した生活の中で疲弊している親子が多いらしい。自分たちはたまたまうまく生活を続けられたけれど、子どもの居場所について必要性を感じていたし、他人ごとではありませんでした。

子ども食堂の急速なひろがり

子どもの貧困問題がクローズアップされ、“子ども食堂”が急速に広がり始めた 2015（平成 27）年、電車の吊り広告で“KS アカデミー”（※）を知り、ソーシャルビジネス講座を受講しました。そこで講師をしていた田代さんと出会い、子ども食堂の立ち上げに協力しませんかと声をかけられ、ボランティアを始めたことが、NPO 法人ぐらすかわさきの職員になったきっかけです。でも入職後は、前職の経験がほとんど役に立たないうえに、一人で進めなくてはならない仕事も多く、戸惑いや不安もあり、葛藤の連続でした。

2016（平成 28）年から、月 1 回のイベントとして、“メサ・グランデ”を会場に始めたのが、“地域食堂めさみーる＋（プラス）”。月に一度ですが、夕食づくりの心配をせずに、家族で立ち寄って頂き、みんなでカレーを食べてほっと笑顔になって欲しいと思っています。活動を始めて 2 年半になりますが、地域のさまざまな人々が来てくれることは何よりの喜びです。常連さんの赤ちゃんが成長する様子が見られたり、まちで出会ったとき「カレーのおばちゃん」って子どもたちが呼んでくれたりするようになりました。

子どもたちの居場所が少ないことの気づき

地域に住む普通の母親だった私が、支援者になってみて気づいたのは、「子育て中のママの居場所」「高齢者や認知症高齢者の居場所」「精神障がいの人の居場所」などいろいろな居場所が地域に広がりつつある中で、子ども同士が気軽に行ける居場所は意外に少ないということです。

私の娘も学童保育が休みだと行くところがなかった。こども文化センターなども自宅近くになければ、遠くて、わざわざそこまで？となります。地域のいろいろな人が利用できる施設なども、休館日だったりすると、子ども達が外の階段でゲームをしている姿も見かけます。私たちが子どもの頃は、町の駄菓子屋さんや学校の校庭などがいつでも行ける居場所だったけれど、今日では、そういうわけにはいかない。

そこで“メサ・グランデ”では、“めさみーる＋”の運営だけでなく、同じような問題意識をもって活動したい人や団体に、積極的に会場提供などをしています。土・日・祝はレンタルスペースとして場所を貸し出し、地域の子ども・若者の居場所を増やす取り組みに協力しています。

めさみーる＋

2016（平成 28）年 2 月にスタートした地域食堂。第 3 木曜日の夜、“メサ・グランデ”で大人 300 円、子ども（18 歳まで）100 円、シニア（65 歳から）100 円でカレーライスが食べられます。

対象は限定せず、「誰でも来られて相席上等」がモットー。敢えてコンセプトを強く出さず、集まってくれる人に場を提供するスタイル。前日の下ごしらえは、地域活動支援センターの利用者が、当日の運営はボランティアが担っています。月 1 回のイベント的実施ですが、結果的に、コミュニティカフェ

＜ごちゃまぜコミュニケーションの秘訣　in メサ・グランデ＞

毎週金曜日の夜はボードゲームカフェが開かれている

大きなテーブルで相席上等！ここで食事すれば大家族のような関係に

店先のアプローチはふらりと立ち寄りやすい八百屋スペース

生産者名を表示して地元農家と買い手の関係をつなぐ

PROFILE

ソーシャルビジネスを学ぶ社会人講座の受講をきっかけに、2015 年に NPO 法人ぐらすかわさき入職。現在は法人のソーシャルビジネス支援事業を通じて地域の居場所作りを応援しつつ、「食」を通じたコミュニティづくりの実践として「地域食堂めさみーる＋ 」の運営も担当している。

“めさみーる＋”は月に１度の短期決戦！ボランティア中心のメンバーでオープン前の打ち合わせです。

としての“ メサ・グランデ ”の周知の一助になっています。また、「カレーライスなら作れそう」というボランティア希望者の掘り起こしにもつながっています。

法人（中間支援団体）の強みを活かした運営体制

①食材提供

NPO法人「セカンドリーグ神奈川」が、お米やカレールウなどの食材を提供してくれています。

②インターン受け入れ

子ども食堂を研究テーマとする大学生、また市職員のNPO法人派遣研修などの実習の場として受け入れています。

③障がい者の参加

“メサ・グランデ”では地域活動支援センター事業もおこなっているため、障がいのあるメンバーも下ごしらえや食事に参加します。

④寄付による支援

ライオンズクラブや商店会など地域の団体に趣旨を説明し、寄付を受けています。また個人的に資金や食材提供などで協力してくれるボランティアさんもいます。

メサ・グランデ

2012（平成 24）年オープン。市内の都市型農業の応援・紹介活動から始まったコミュニティカフェ。

地元農家から仕入れた野菜の販売も行っており、八百屋、カフェ、地域交流の場の機能を持ちさまざまな人がそれぞれの目的で訪れます。“ メサ･グランデ ”はスペイン語で「大きなテーブル」の意味で、実際に個別席はキッチン越しのカウンターのみ。これは訪れた人同士が自然に相席となり、コミュニケーションが生まれる物理的な仕掛けなのです。さらに“ メサ･グランデ ”は「地域活動支援センター」でもあり、障がいのある人の居場所にもなっています。

参加型の居場所にすることの大切さ

心地のよい地域はそこに暮らす地域の人でつくる

母体法人のぐらすかわさきは、市民自治力を育むことが活動目的の柱です。それは、大人だけに対するものではなく、子どもに対しても同様。“ めさみーる +” にも、「行きたい」より「手伝いたい」って思えるような場所が良いんだと思っています。支えあって生きるまち・地域をつくるには、受け身の人ばかりではできません。「何かやってみたい」「これならできる」を皆が具体化して、一緒に場を創っていけるようにしたいと思っています。

観察力と柔軟性が求められる担い手

私は、川崎市内の子ども食堂を運営する人たちがつながるネットワーク作りに携わっています。子ども食堂は、貧困の子どもの支援のために活動をはじめたところが多いようですが、実際始めてみると、貧困の子どもというより、地域活動情報にアンテナの高い市民が集まって、対象としていた子どもがきていないという事態になっているようです。でも、ネットワークで話し合いを進めていくうちに、そもそも、貧困かどうかは、定義がないものなんじゃないかと。経済的に貧困で、食べられない子どもも確かにいるかもしれないけれど、人間関係が希薄で、孤独な親や子どもといった「関係性の貧困」も対象にしていくことも必要ではないかと考えます。

“ めさみーる +” の活動においてさまざまな人が、自分ができることを提供してくださっていますが、関わってくれている人が、今時の社会の子どもや子育ての課題を、はじめから知っていることはとても少ないです。居場所の中で、実際に出会い、コミュニケーションを図ることで、気づきます。

だから、支援の仕方について決めつけは禁物。常に私たちは観察力と柔軟性をもって支え合える支援者でいることが大切と思っています。

※　川崎市と専修大学の協働による社会人向けのソーシャルビジネスアカデミー

団体の概要

認定 NPO 法人 ぐらすかわさき

所在地	川崎市中原区新城 5-2-13　プリマＳＫ武蔵新城１階
TEL	044-872-9325
WEB	http://grassk.org/
代表者	理事長　小林寛志
活動内容	①地域のたまり場の運営、②市民活動の応援、 ③コミュニティビジネスの支援、④その他の中間支援

開設年月日	2001 年 1 月 28 日
活動日	月～金を基本とする
スタッフ	15 名
運営資金	事業収益、補助金、寄付金、会費

メサ・グランデに関わるメンバーたち

前田 瑞穂さん メサ・グランデ店長

看護師として大学病院の小児科に15年勤務。30代で体調を崩し離職後、精神障がい者のニーズにこたえるようなカフェを作りたいという夢を持ち、ぐらすかわさきが実施するコミュニティカフェ講座を受講しました。そこで田代さんと出会い、人柄や活動内容に魅力を感じたことから職員になりました。精神障がいの人に携わっている医療専門職の間で、病院に受診したときやカウンセリングを受けた帰りに立ち寄れる場（カフェ）があると、心穏やかに時間を過ごせるのではないかと話していました。“メサ・グランデ”が医療現場ではできない日常的な支え合いの場となるよう、気軽に声を掛け合いメンバーとの関係を楽しんでいます。都筑区から毎日、元気に自転車で通勤しています。

今田 由紀さん メサ・グランデ パートスタッフ

地元在住です。“メサ・グランデ”で友達とランチし、食事が美味しくて気に入りました。障がいのある人が働いているところも面白そう、と思いボランティアに。半年後にスタッフとなり、現在は週２回のカフェでのパートに加え、“めさみーる＋”を手伝っています。

“めさみーる＋”の良いところは、障がいのあるメンバーがイベントとして楽しめること。彼らの日常にはイベントといえるような出来事が少ないのです。その上、お客さんにサービスすることで、感謝され、人気者になれるので、複数のメンバーが毎回心待ちにしています。

山岸 洋平さん

地域活動支援センター 利用者

“めさみーる＋”の日は「クラウンさん」と呼ばれています。病院訪問でバルーンアートをするときには、なかなか「攻めたこと」ができないのですが、ここでは衣装付きで本格的なクラウンショーを披露できます。おっと、そもそも山岸とクラウン「KOKO」は別人なんですが！

山岸は学生時代から集団の中でうまくいかないことが続き、精神科で薬をもらっていました。けれどもほとんど効かなくて。のちに「発達障がい」の診断を受け、これまでのすべてのことが自分の中で整理されました。フルタイム勤務で体を壊した経験から、正社員にこだわらず掛け持ちでバイトをしてみたら、このやり方が自分には合っていると気づきました。今は居心地のいい複数の集団を自ら探して所属。そのほうが一つ上手くいかなかったときに助かりますしね。その一つが“メサ・グランデ”。“メサ・グランデ”の良いところは、障がいのあるなしで区別しない、人使いが荒いところ？？良い意味で、遠慮のない関係性がみんなの中にあることが気に入っています。

NPO法人ぐらすかわさき（運営法人）について

「場」と「人」の強みを生かしたコミュニケーションの可能性

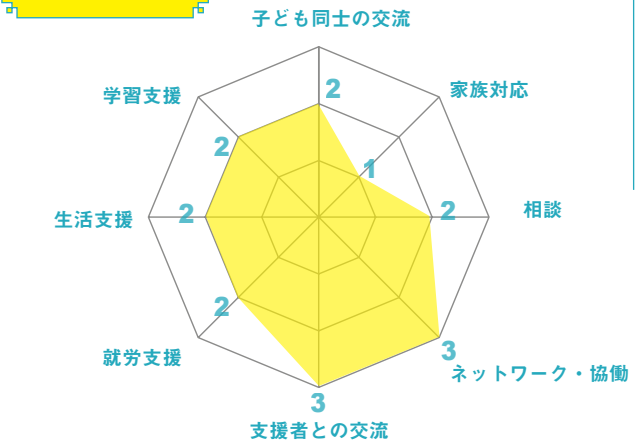
田代 美香さん NPO法人ぐらすかわさき副理事長

NPO法人ぐらすかわさきは、1999（平成11）年、当時の“共育ちの会”、“暮らしと市政を結ぶ会”、“生田緑地の自然を守る会”のメンバーを中心にスタートし、常設の場を持つ中間支援団体へと発展してきました。目的は、誰もが暮らしやすい地域社会をつくるために、暮らしの中で気がついた問題を持ち寄り、語り合い、経験や情報を共有する場をつくること。また市民が必要な情報を入手し、読み解く力をつけ、主体的に問題を解決できるよう、その活動を応援することです。

具体的には、複数の地域のたまり場の運営、市民活動やコミュニティビジネスの支援などをおこなっていますが、それぞれに新しい支援者が育ってきています。大澤さん、前田さんのような、地域で同じ夢をみられる人、次の世代のリーダーとなる人と一緒に、地域に活動を増やしていきたいですね。

場があることで多くの人との出会いを毎日蓄積できます。調査・研究をしたり講座を運営する中間支援の仕事だけでは、今のさまざまな事業への展開はありえなかったと思います。堅苦しい話でなく、そこに行けば世間話をしながらちょっとした相談ができたり、会話の中で思ってもみなかったアイデアが生まれたり。そうやってつながった人が場を活用してどんどん新たな資源を生み出していきます。そんな好循環が生まれるのが場の力なのです。

活動の自己評価



NPO法人ぐらすかわさきとして川崎市の子ども支援ネットワークなどに関わり、最新の情報や問題を共有している。また“メサ・グランデ”の場を利用して学習支援付きの子ども食堂や若者カフェなどを定期開催する支援者、都市農業との協働関係も構築している。“メサ・グランデ”は地域活動支援センターでもあり、障がいのある若者の日中の居場所となっている。

子ども食堂　多世代交流

ひとりでご飯を食べないでみんなで食べよう

06 ずし子ども０円食堂

逗子市

ずし子ども０円食堂　代表

key person

草柳 ゆき恵さん（67 歳）

PROFILE

主任児童委員を務め、保育士資格と幼稚園教諭の免許を持つ。幼稚園、保育園勤務の後、PTA役員、小中学校の評議員、食生活改善推進員、保育園で子どもたちにダンスを教えるなど、多様な経歴を持つ。ご自身も社交ダンスを続けており、介護施設や発表会、競技会等でご主人とダンスを楽しんでいる。

ずし子ども0円食堂プロジェクト誕生

私は保育士の経験やＰＴＡ、食生活改善推進員、主任児童委員として小中学校の評価、評議員、親子の料理教室や保育園２園でのダンス指導等さまざまな形で子ども達に関わって来ました。特に主任児童委員として市内の子ども達の困っている現状を知っても、アプローチ出来ないもどかしさを感じていました。

その頃“子ども食堂”の活動がクローズアップされ、「私達でも出来ないか、やりたい！」との思いが湧き出ました。しかし何から始めたらいいのか見当もつかず、逗子市社会福祉協議会（以下、社協）の職員に相談したら「草柳さん、他にも始めたい人がいるよ」と引き合わせて下さって 2016（平成 28）年２月からプロジェクトが立ち上がりました。

プロジェクト会議は 12 名のメンバーと社協職員の方に指導していただきながら、経済面、子ども達の安心安全やアレルギー対応、保健所許可、周知活動、メニュー、寄付、ボランティア等、活発に意見を出し合い、「初めの１歩」は５月逗子市福祉会館でプレオープン。保育園の園長先生達も応援に駆けつけてくれました。２回目は沼間コミュニティセンター、３回目は亀岡八幡宮社務所で開催、見えてきた問題を解決しながら最適な場所を探しました。

プレオープンから見えてきた子どもたちの姿

プレオープンのアンケートでは、こんな結果が出ました。

朝ごはんや夜ご飯を食べない日がけっこうある子ども　２人
朝ごはんや夜ご飯を食べない日がたまにある子ども　10 人
だれもいなくひとりで夜ご飯を食べる日がけっこうある子ども　３人
だれもいなくひとりで夜ご飯を食べる日がたまにある子ども　７人

このアンケートから、「何らかの理由で朝ごはんや夜ご飯を食べない子」「ひとりでご飯を食べている子」は確実にいることがわかりました。私も含め、“ずし子ども０円食堂”のスタッフは、「ならば私たちにできること『ひとりでご飯を食べずにみんなで食べよう』という場づくりを進めること」という思いを強くします。

“ずし子ども０円食堂”は、2016（平成 28）年８月より定例での開催となりました。場所は、“沼間小学校区コミュニティセンター”と“逗子市体験学習施設スマイル”でそれぞれ月１回開催し、2018（平成 30）年８月より“逗子小学校ふれあいスクール”でも実施しています。

ずし子ども0円食堂を支えるスタッフやボランティア

スタッフは 12 名、主任児童委員・保育士・音楽療法士・看護師・介護士・セラピスト・団体職員・ラジオパーソナリティー等さまざまなメンバーです。仕事を持っているスタッフが多いのですが、調整をしながら活動を続けています。スタッフからは「何が何でもでは苦しくなるけど、無理せずやっているから…。適度な緩さがいいんだと思います」「そしてなにより楽しいから続いてる」と言われています。

関係機関との関わり

市には、「後援及び協力」をいただいています。そのため使用施設が無料で借りられたり、小中学校へのチラシ配布を始め、公共施設、保育園への配布と、紆余曲折ありましたが、今は周知活動がスムーズに出来ています。その他「国際ソロプチミスト逗子・葉山」「三浦半島地域労働者福祉協議会」、個人でのご寄付もあります。

逗子市商工会議所青年部が「市民祭り」の時、中学生を対象に「あきんど塾」を立ち上げ、ラーメン屋さん体験をし、その収益金を青年部と中学生が一緒に寄付に来てくれました。これは形に残そうと皆で話し合い、カレー皿 80 枚を買いました。それまでは 100 均で購入したプレートを使っていて、カレーが溢れたり、汚れが落ちにくかったりとの問題を抱えていたのですが、ミッキーマウス型のプレートにしたら問題解決です。白、水色、ピンクと形と色の可愛さ大好評で食品数が増えても、カレーと混ざることがありません。会場によっては温水に

限りがあり、洗浄に心配があったのですがミッキーマウスのプレートだと何とか対応出来そうで、一安心です。担当の中学生には「ミッキーマウスのお皿買ったよ、とても助かってるよ」と伝えました。

また地元のスーパーのスズキヤさんは毎回お肉、牛乳の生鮮食品のご寄付と社員さんがお手伝いをしてくれますし、地域の方からはお米や旬の野菜、カレーに欠かせないじゃがいも、玉ねぎのご寄付をいただき、おかげさまでこれらの食材は買ったことがないのです。

パワーをもらっていること

“ずし子ども０円食堂”は、ボランティア養成所みたいな部分もあって、ボランティアをやってみたいけど、どうしたらよいのかわからない人もやってきます。初めてで恐る恐る参加した人が、イキイキとしてくる。そのうちに「私はこういうことをしたかったの！」と輝きだす。「何かやりたいと思っていたけど、やりかたがわからなかった」という人が多いんです。

逗子小学校区ではふれあいスクールの場所で“ずし子ども土曜食堂”を４月から開催しました。保護者有志の方々が何かさせて欲しいと、フラッグ型のれんやカラー刷りのポスター制作をしたり、時には各テーブルに生花を生けて下さいます。そんな人と出会うと、私達は嬉しくってパワーをたくさんいただくのです。そして何より子ども達の笑顔がパワーの源です。

お皿拭き用のタオル。ボランティアさんが準備してくれたもの。

大事にしていること

子どもの状況を知っているのと知らないのでは、子どもに声をかけるときの言葉が違ってきます。その時にかける言葉でその子の人生が変わるかもしれない。救える手を逃してしまうこともあるかもしれない。逗子の子どもたちは、みんな幸せそうに見えます。でも“ずし子ども０円食堂”に来た子で、「今日は朝食べてないんだよ」とつぶやく子どもがいる。そういうつぶやきをね、大事にしたいし、しているんです。

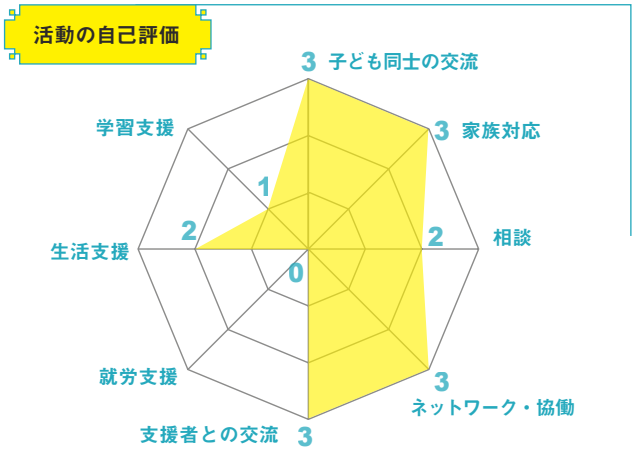
軽い認知症のおばあさんもエプロンをもって来て、手伝ってくれます。“ずし子ども０円食堂”で、子どもたちとそこに来た人、おじいちゃんやおばあちゃん、ボランティアの地域の人。私はいろいろな人をつなげたいんです。この食堂のような地域の居場所でつながりができるんです。いろいろな人が来て、スタッフやボランティアや参加者同士のつながりができて、地域で顔がわかることが「孤食」「貧困」の予防になっていると思っています。

神原さん　スタッフ調理担当

差し入れの食材を見て、草柳さんが「今日はこれ！」とメニューを決めます。今までで子どもたちに人気だったのは、ニンジンの葉っぱを素揚げして塩を振ったものやいりこをレンジでチンして作った田作り。どちらも子どもたちに人気でどんどんなくなっちゃいました。

石井 星山さん　ボランティア尺八演奏

草柳さんから、子どもたちに尺八の柔らかい音色を聞いてもらいたい、と話をもらって始めました。子ども食堂では、季節も考えて選曲しています。今日は村祭り、虫の声、など。この間は、小学校５・６年の男の子が尺八に合わせて歌っていたし、小さな女の子が３人で音色に合わせて踊っていて。うれしいよね。一度だけ子ども食堂に来れなかったときは、「笛のおじさん来ないの？」と聞いてきた子どもがいると聞いた。やっぱりできるだけ参加しようと思ったね。子どもは耳がいいからね。楽しみながら参加しているけど、尺八を吹いているときは真剣ですよ。



市役所、小学校、商工会議所、地元のスーパー、福祉系の大学等、多くの関係機関とのネットワークがある。子ども食堂には、ひとりで参加する子どもが多いが、なかには親子での参加もあり、スタッフに主任児童委員が複数いるため家族対応や子ども同士の交流も行っている。親子と関係ができる中で、相談への対応も実施。生活支援は表立ってはしていないが、気になる子どもには帰りに配布するパンの缶詰などを自宅まで届けることもある。

ある日のずし子ども０円食堂

８月下旬、まだ暑さの残る午後、東逗子駅から歩いて７～８分にある「体験学習施設スマイル」で０円食堂は開催されました。同じ敷地内には市営プールや乳幼児のプレイルーム、学習室、体育館があり、真夏の太陽のもと、プールで遊ぶ親子や、学習室で夏休みの宿題をする小中学生がいます。

４時すぎから浮き輪をぶら下げた小学生や０歳児を抱っこしたママと３歳ぐらいのお兄ちゃん、小学生と中学生の兄弟など、子どもたちがどんどんやってきました。ご飯スタートの５時までオセロなどのボードゲームやカードゲームをして遊ぶ子どもたち。ボランティアも子どもと一緒に遊びます。

会場の前にある砂場では、小さな子どもたちが砂遊びの真っ最中。会場からは「ご飯だよー。カレーもスイカもパイナップルもあるよ」と声がかかります。その声に子どもたちも顔を上げます。

メニューは定番のカレーライス、スパゲティサラダ、フルーツポンチ。副菜はその日の寄付食材により変わります。今日は、カボチャのゴマみそ和え、ゴーヤのごまチップスなどに、スイカにパイナップルにバナナ。用意したミッキーマウスのお皿は、お料理がてんこ盛り。

ご飯を食べるテーブルには、テーブルリーダーがいて（スタッフがテーブルごとに決めます）、全員がそろうと「いただきます」食べ終わると「ごちそうさまでした」と声かけをします。

小学生の男の子二人が水筒をぶら下げてやってきました。にぎやかな会場の中、兄弟二人でカレーを頬張っています。「最近は毎月来ているよ。ここのカレーは好き。おかわりするよ。」食べ終わった後も仲良く二人で帰っていきました。

子ども食堂は６時で閉店。スタッフが看板をしまいます。夕方の涼しい風の中、砂場では食後の子どもたちが遊んでいます。砂場の周りにはママたちが子どもを見守りながら、「ご飯を食べて、遊んで、あとは帰るだけだからゆっくり遊ばせられるね」とおしゃべりしています。

２カ月の赤ちゃんを抱っこしたママも砂場周りのベンチでのんびり。３歳ぐらいのお兄ちゃんは、砂場の隣の小山でお友達と走っています。「前回の子ども食堂でもこの子（赤ちゃん）が大泣きして、スタッフの人が抱っこしてくれていたんです。上の子は赤ちゃんに遠慮するのか、普段は私にそんなにくっついてこないんですけど、ここではスタッフの方が『せっかくだからママのところに行きなー』と上の子に声をかけてくれて、くっついてました」とママ。スタッフのいる子ども食堂は、ママにも子どもにも幸せな時間を運んでいます。

団体の概要

ずし子ども０円食堂プロジェクト

所在地	逗子市内３か所 （沼間小学校区コミュニティセンター・逗子市体験学習施設スマイル・逗子小学校ふれあいスクール）
TEL	090-2424-1465
代表者	草柳　ゆきゑ
活動内容	「ひとりで食事をすることが多い、インスタント食品で食事を済ませることが多い」このような子どもたちに温かいご飯をおいしく楽しく味わって笑顔になってもらうこと。地域での世代を超えた交流の場づくり
開設年月日	2016 年２月
活動日	市内３か所の会場で月１回ずつ 時間も会場による
参加者数	会場による（60 名～ 100 名程度）
スタッフ	12 名
ボランティア	毎回 10 名程度
利用料金	子ども 無料、大人 300 円の寄付

07 労働が人を育て、社会を育てる 就労支援センター 働楽（はたらっく）

横浜市中区

ワーカーズコープ
神奈川事業本部　事務局長
自立就労支援プロジェクトリーダー

key person

鳴海　美和子さん（50歳）

公の就労支援で支えにくい就労困難者の増加

ワーカーズコープの事業本部では、さまざまな就労の相談に対応しているのですが、現行の制度政策で支援できない就労困難者が増えていることを感じます。例えば、次のような人です。

中学卒業後の就労 / 夜間高校（定時制高校）に通う子どもの日中就労 / 引きこもりの人の就労 / 高齢者の就労

中学卒業後の就労については外国籍の人が多いのですが、自分の進路の選択さえ、きちんとした支援を受けていないケースが多くあります。こういう若者には、その保護者にも支援力がなく、在籍していた学校でも満足な支援が行われていない状況がみられます。また、定時制高校に通う学生の日中の就労先も、学業を全うできる働き先を得ることは容易ではないようです。

さらに、引きこもり期間が長期化した就業経験の少ない中高年の方や、65 歳を過ぎてもさまざまな理由で就労先を探している高齢者など、実に多様です。

協同労働って何？

少子高齢化、都市部への人口集中、産業や福祉のあり方など、相互に関わり合う多様な課題に直面する日本社会は、その持続可能性が大きく問われ、新しい社会の在り方を皆で見出す必要性に直面しています。ワーカーズコープは、35 年余り「協同労働」という働き方を考え、実践につなげようとしてきました。協同労働とは端的に言うと次の 2 点を基本的な考え方としています。

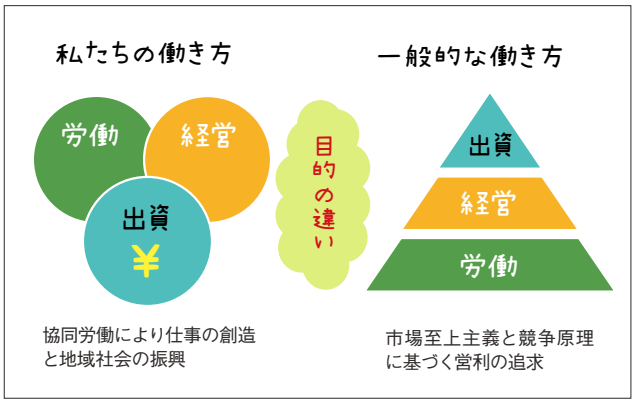
・働くもの、市民一人ひとりの主体性が高まり発揮される
・人と人とが協同の関係で結ばれ、その連帯性が人と社会を豊かに育む

経済の低調が深刻化し、失業問題が広がる中、人と地域が必要とする「良い仕事」を追求し、地域の人々との関係を築きながら、仕事起こしをし、働くことの意味と誇りを見出すことに努めてきました。

現在、災害に見舞われた地方、人と人との結びつきが薄れた都市など、地域の共同体機能が弱体化した地域でも「産業」と「労働」を結んだ地域づくりを、「共生と持続性」を基盤に、あらゆる人々と、地域の自然・歴史・文化などの資源とを結び合わせながら行おうとしています。

私たちの働き方

協同労働は、最終的な目的として「営利を追求」する働き方とは目的が異なります。



「協同」とは「力を合わせ、助け合い、支え合って共に働くこと」そのため、「出資」「経営」「労働」を三位一体で組合員全員が担い合う協同組合になっています。

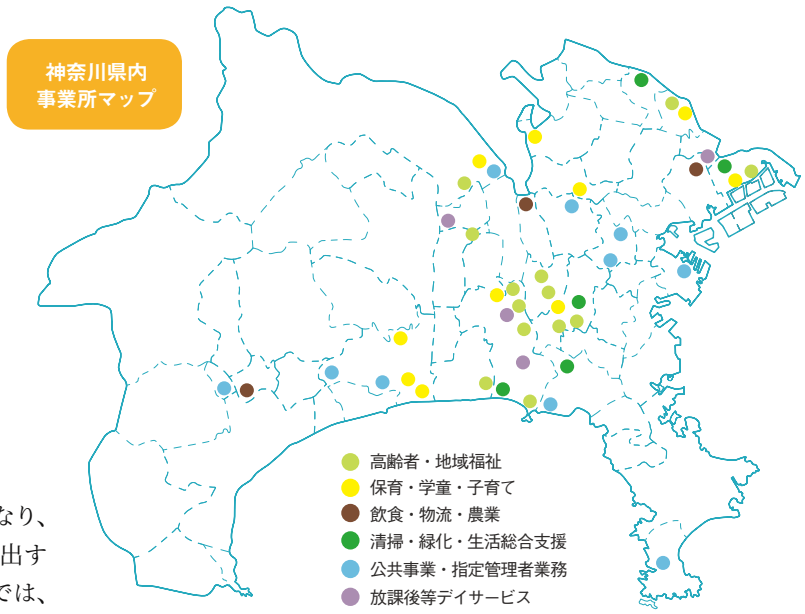
【出資】　一口5万円〜。給料天引きにもできる。すぐ出資できない人でもOK、分割でもOK。
【労働】　ワーカーズコープは最低賃金を厳守。
　　一時金有り（但し業績による）
　　週20時間以上の労働には社会保障手当もつきます。
【経営】　全組合員による経営（働く人が主人公）
　　意見を出し合い、経営に参加する。

働楽（はたらっく）の就労支援

今日の子どもの育ちの課題のなかで「生活経験」があげ

PROFILE

証券会社の社員だったバブル期に「働くということ」を考えるようになる。結婚後、ヘルパー免許取得。地域密着型のデイケアの仕事を通じて人々の暮らし、地域ニーズが見えてくる。現在行っている、中学生から高齢者までの就労支援は、ワーカーズコープ（日本労働者協同組合）の社会連帯と協同のチカラで新しい福祉社会を創るという原則のもと、一人ひとり、一歩一歩進めている取り組みとなっている。



られます。昨今はアクティブラーニングなど主体的で経験を重視した学びの大切さが社会で言われるようになりましたが、近代教育は学歴偏重主義の時代が長く続きました。また、子ども達の生活は職住分離によって、生活の中で働く大人を観ることが少なくなり、仕事をする人に憧れたり、自分の適性を生活の中で見出すこともしにくくなっています。更に、社会経済の現状では、一人当たりの所得も低くなり、就労によって得る賃金・給与による自立生活を確立することも容易ではありません。私たちの就労支援センターでは、そういった就労困難者が直面している事情をつかみつつ、支援を行っています。

仕事を体験する支援

働楽就労支援センターでは、ワーカーズコープセンター事業団として、分野の異なる100以上の事業所を持っており、この様々な働く場で相談者は就労体験をすることができます。

- 高齢者・地域福祉
- 保育・学童・子育て
- 飲食・物流・農業
- 清掃・緑化・生活総合支援
- 公共事業・指定管理者業務
- 放課後等デイサービス

さらに神奈川県域を、川崎エリア / 横浜エリア / 湘南三浦エリア / 県央エリア / 県西エリア等に分け、各地域をカバーしており、体験したい仕事を体験したい場所で行うことができます。

仕事を選択する支援

自分に適した仕事とは、その人が持つ関心や知識や技術などによって選択されることもありますが、職場の風土や働く仲間などの多様な要素によって、継続的に意欲を持って働ける場所となります。働楽就労支援センターでは、一つの仕事を選択することもありますが、複数の仕事を自分なりにマネジメントしながら並行して続けることも可能です。

就業者Mさん（21歳　就業歴2年）

天気が悪いと外出する気さえなくなる僕でした。今、動物公園の仕事を習い、一緒に働く身近な仲間は80歳の高齢者。どんな悪天候でも仕事に行き仕事をやり遂げる姿勢を目の当たりにして、「見習わなくては‥」と思いました。また、20代の僕がもっとやる気を出さなければダメだと思うようになりました。将来はもっと仕事をしたいです。夢は物流の仕事に就くことです。

【事業所職員から】

川崎市の就労支援センターからの紹介で相談対応しました。ひきこもり状態で、コミニュニケーションが苦手で、社会に出ることに不安を感じていました。複数の就労の場の見学後、動物公園での仕事に魅力を感じ、就労体験を始めました。現在3年目。意欲的に仕事を続けています。

就業者Sさん（36歳　就業歴4年）

はじめはワーカーズコープの働き方に戸惑いました。自分は、就労経験もないし、人と話をするのも苦手。こんな自分の働きが、地域や人と関係ができて、社会を創ることにつながるんだろうか。とてもイメージが湧きませんでした。でも、ここでの就労体験は、私を仲間として受け入れてくれ、一緒に仕事をさせてくれました。今、ワーカーズの居場所で、水彩画の講師もさせてもらっており、仕事の仲間に感謝しつつ、少しずつ仕事をする自分に自信も持てるようになりました。社会保険も自分で払えるようになって、自立に近づいていることも喜びです。これからもあったかい仲間たちと仕事を続けていきたいです。

【事業所職員から】

就労を始めたころは、ともかく声が小さかった。「挨拶は大きな声でね」「緊張しないでゆっくりなじんでね」などアドバイス

団体の概要

就労支援センター　働楽（はたらっく）

所在地	横浜市中区伊勢佐木町2-66 満利屋ビル 8F
TEL	045-341-4192
WEB	http://www.workers-coop.com/
代表者	鳴海 美和子
活動内容	就労体験や就労準備講座の実施 就労に必要なマナー、コミュニケーションを学び、生きる力をつける就労をサポート
開設年月日	2016年7月1日
利用時間	月～金曜日　10：00～17：00
対象者	神奈川県内に在住の方　原則15歳～65歳
利用料金	無料
資本金	なし
助成金	なし

をしたと思います。仕事をする中で、Ｓさんと対話を重ね、彼がデザインしたり絵を描くことが好きなこと、できれば、そんな“好き”を活かした仕事をしたいことがわかってきました。

自分らしさと自立を実現する支援

“働楽”では、個人の就労という課題も解決しようとしていますが、良い就労とは、人と地域に役立つ仕事。働く人の成長と人々との豊かな関係を育める仕事。働く人の生活の豊かさと幸せの実現を目指すことができる仕事であることが大切だと思います。“働楽”では、こうした良い就労に出会い継続的に従事して、自分らしさと自立に導きたいと思っています。

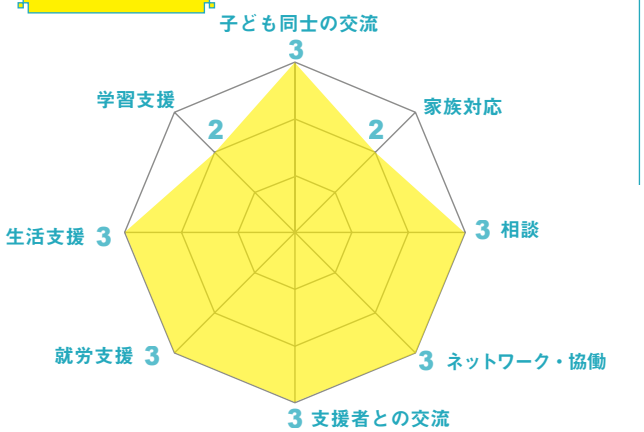
共生・協同・社会連帯のまちづくり・地域づくりを

雇用不安・貧困の連鎖・社会的排除が広がる中で、「働きたい」と願う誰もが働ける地域づくりを目指します。

社会は今、未曽有の災害なども経験して大量消費社会の在り方を見直し、地域の貴重な文化や技術・資源に再び光を当て、新しい仕事起こしや自立した地域経済の確立に取り組んでいます。以下はこうしたことを実現するための対話をする拠点のいろいろです。すべての人々とこうした取り組みを広げていこうとしていますが、次世代を担う子どもや若者の積極的な参加を求めているのは言うまでもありません。

- エネルギーの地産地消を！（再生可能エネルギー事業）
- 安全安心の食と里山再生（食・農）
- 林関連事業
- 建物総合管理事業
- 自立と自治の拠点に（コミュニティ施設関連事業）
- 安全・安心の除菌剤（クリーンキラーエース販売）
- 子どもを真ん中に据えて（子育て支援）
- 誰もが暮らせる地域を（障がい者支援）
- 働きながら生きる力を回復（若者自立支援）
- 居場所と役割のある町へ（生活困窮者自立支援）
- いつまでも元気で安心して暮らせる地域に（高齢者関連事業）
- 緑化・循環事業

活動の自己評価



子ども同士の交流はコミュニケーションや職場マナーの研修などを行って異なる就労先の人でも交流できるようにしている他、飲み会なども盛ん。

家族支援・生活支援については、働くことを希望している本人も家族も地域での生活ができるように支援していくことが大切なので、見守り・伴走しながら“働楽”との関係性を築きながら行っている。

活動のプロセス

現状把握

- 年齢を問わず、生きづらさを抱えた人たちの増加
- 社会に出られない、金銭的にも精神的にも苦しい生活状況
- 失業者の「よい仕事」との出会いの必要性
- 地域社会における仕事起こしの必要性

効果把握

インプット　地域の現状

- 孤立した地域住民（高齢者・若者・母親）
  隣に誰が住んでいるのかわからない。
  挨拶はないが、苦情はたくさん
- 競争社会についていけない若者
- ＩＴ社会についていけない高齢者
- 子育てに一人で悩んでいるひとり親家庭

アクティビティ　具体的な活動

- 地域や支援団体に一人ひとりが主人公の働き方の声掛け
- 各種講座の開催
  介護、生活サポーター、生活支援など
  誰でも参加できる講座開催によって地域の現状を知り、仲間が出来ることの喜びをみんなで分かち合う
  講座の卒業生が主体的に次回の講座を開催し地域に出ること
- 仲間づくり
- 今ある、仕事のニーズと就労のマッチング、業務の細分化

アウトプット　産出物

- 働く仲間が増えた。
- みんなが微笑んでいる。
- 地域に必要な仕事おこしができた。
  「困った」＋「困った」＝「困らない」
  【地域全体がみんなのおうちへ】
- 就労支援団体や自治体から就労支援の依頼が随時来るようになった。

アウトカム　活動成果

- 仕事起こしから定着した地域事業
- 小さい困ったから、地域の「へそ」へ沢山の地域住民が集まって来た。
- 持続可能な社会の実現へ着実に向かっている。
- 地域の団体との連携が密になってきた

インパクト　生じた変化

- 社会的孤立が解消できてきた。
- 地域の意志が見えてきた。
- 支え合い、「共に生きる」社会の実現に向かっている
- 人材不足の解消と事業体の連携

ゆがわらっことつくる

08 多世代の居場所

足利下郡湯河原町

伴 英美子先生　山田 貴子先生　坂倉 杏介先生

“居場所”は、みんなでつくる多世代の居場所

“ゆがわらっことつくる多世代の居場所”は、「未病に取り組む多世代の共創コミュニティの形成と有効性検証」事業の一環として、2016（平成 28）年 11 月にオープンしました。湯河原町周辺に住む多様な人が集い、「斜めの関係」を育み、世代を超えた様々な活動が生まれる“多世代の居場所”を作るプロジェクトです。

湯河原子どもフォーラム

2011（平成 23）年、湯河原町では、教育委員会主催の「湯河原町子どもフォーラム」がスタートし、コーディネーターを山田が担当しています。対象は、湯河原の小学 4 年生から中学 3 年生。笑顔あふれる最高の楽校（がっこう）を実現するために、学校の垣根を超えて、多くの子ども達が参加しています。子どもフォーラムでは、子どもたちが主体となり、年に 7 回のプログラムを作っています。

2011（平成 23）年、2012（平成 24）年は子どもたちが自分たちでプロジェクトを考え実行する、プロジェクト型だったのですが、2013（平成 25）年あたりから、子どもたちのもっと本気で対話がしたい！本音でおもいっきり話したい！という想いから、対話型のフォーラムに変化してきました。子どもたちが本気で話をしたいこと、「自由とは？」「友達って？」「大人と子どものちがいってなに？」「どうしていじめは起きるの？」などについて、子どもから地域のお年寄りの方も一緒になって、対話をします。

“居場所”は未来を創る場

子どもフォーラムだけでなく、もっと日常の中でも本気で話せる場がほしいな、ありのままの自分で居られる場所がほしいなという子どもたちを中心に、“多世代の居場所”づくりはスタートしました。2015（平成 27）年秋から子どもたちや地域の方々と一緒にワークショップを実施し、どんな場が欲しいか丁寧に対話を重ねました。

2016（平成 28）年春から、社会技術研究開発センター（JST-RISTEX）の助成金を得て、多世代の拠点を創ることができることとなり、物件を探すために、子どもたちと一緒に湯河原町内の町歩きを繰り返しました。何軒も見て回っては、子どもたちと大学生、大人たちで意見を出し合って、今の場所に決まりました。物件の改装（リノベーション）は 2016（平成 28）年 5 月から始まりました。家づくりのプロから指導は受けるけれど、「この“居場所”に来てほしい人と一緒に作る」ことを大事にし、延べ 30 回の「放課後リノベーション」を実施。子どもたち、親御さん、学生、地域の方々が参加して、少しずつ作り上げました。子どもたちも電動ヤスリを木材に施したり、壁にコテで珪藻土を塗ったりと「自分たちの“居場所”」を作り上げていく過程を経験し、楽しさやプロの仕事の本物を体感することができました。

使わない家具の取り外しや壁の撤去も自分たちで

斜めの関係とロールモデル

学生たちのチカラがとても大きいです。この“居場所”に、大学生たちがいることが子どもたちにとって、最初のうちはものすごくセンセーショナルだったと思います。子どもたちの中に、以前は「スポーツだけやっていればいい」と言われていた子どもがいました。その子は、大学は特別なところと感じていて、大学に進学するというイメージを全く持っていなかったのです。大学生と出会い自分たちと何も変わらないということに気が付きました。そして、自分も大学生になろうと思った！というエピソードがあります。

PROFILE

（山田先生）湯河原生まれ、湯河原育ち。湯河原が大好きです。湯河原町子どもフォーラムにもコーディネーターとして関わり、「居場所」の創設から関わってきました。4歳の長女も「居場所」で元気に遊んでいます。

（坂倉先生）多様な人が共にいられるやわらかな居場所づくりに各地で携わってきました。今は、地域のみなさんと居場所で語り合う湯河原の未来に、ワクワクしっぱなしです。普段はコミュニティやまちづくりを教えたり研究したりしています。

（伴先生）2016 年から、いろいろな世代の人々が集う「場」づくりに参加し、その魅力にはまっています。子ども達の願いである、「誰もが安心してありのままの自分でいられる居場所」を町の皆さんと一緒に創っていきたいと思います。普段は介護分野のお仕事や研究に携わっています。

また、子どもたちは大学生たちの言動もよく見ています。誰かをからかって笑っている子どもがいたとき、大学生が「それ、おもしろくないよ」と、とても冷静な反応をとっていました。近くにいるかっこいいお兄さんたちが「良しとしない」ことを見て、子どもたち自身が、みんなで気持ちよく過ごすために、やっていいこと、悪いことの行動を選んでいくようです。親や先生が「こうしなさい」といってもなかなか伝わらなかったり、聞かなかったりしますが、斜めの関係である大学生たちを見て、子どもたちが自ら自分の行動を選択しているようです。

大学生たちも、子どもたちにどのように伝えていこうかと言動について深く考えています。子どもたちを一方的に注意したくないと、声のかけ方や話すタイミングなどを大学生たちは一生懸命に考えています。毎回、“居場所”閉所後に、大学生同士で振り返りを実施し、子どもたちや地域の方々との関わり方について、みんなで話し合っています。

“居場所”に集まる大学生・地域の皆さん

伊藤さん　東京都市大学　3年

“居場所”には“多世代共創塾”があります。この塾は、地域のみんなが参加できる塾で月に一度、地域の多世代が対話をしながら未来を描くイベントなんです。運営は、慶應義塾大学・東京都市大学の学生が中心になって企画します。

僕が、“居場所”で出会った人で大好きな人は、この“多世代共創塾”に熱心に来てくれる大村和男さん（80歳）。すごく親しみやすい方で僕たちや子どもたちとも良い関係をつくれる方。笑顔がいい方なんです。それに、勉強家なんです。“居場所”についても、どうして必要なのか、どんな取り組みをしようとしているのか、関心を持ちながら一緒に考えてくれています。年のこんなに離れた人と一緒に活動できることは楽しいです。

小野さん　東京都市大学　3年

私、実は子ども好きじゃないんです。騒いでいる子がいるとイライラして、大人と話している方がいいなって思っちゃう。でも、“居場所”は、面白い。今日も自宅から、2時間近くかけてボランティアに来ました。何が楽しいって、ともかく、子どもと一緒に大学生が、まちづくりのために、地域のこどもたちが元気に育つために、喧々諤々話し合って、活動して、反省して、また、考えることを繰り返します。この対話の面白さは、子どもたちが“居場所”に来てくれるから。ここに来ていなかったら、子どもたちとこんなにかかわることはなかったと思うし、こういう楽しさも味わわなかっただろうな。

川崎　利衣さん

小学校3年生の男の子と小学2年の女の子の母です。長男が学校になかなかなじめず、ずっと悩んでいました。“居場所”には、長男はのびのびと通い続けています。どうしてかというと、長男は個人主義なタイプで集団行動が苦手なのですが、自由な場で、自分のしたいことを選択できるところが良いのだと思います。そして、そうして参加しているうちに気になる仲間ができたこと。これも大きいです。彼がそんな風になれたのは、大学生たちのフォローも絶大です。私自身、大学生の見方が変わりました。

私は、ここで、活動のお手伝いもするようになっているのですが、来ると、いろいろな子どもたちがいることにも気づかされます。複雑な家庭の子ども、親が共働きで自由だけど親との関わりが薄い子。たくましさは感じるけど淋しさも見え隠れします。だから、“学習会＋ごはん”をみんなで一緒にするということは、子どもたちにとっての心の受け皿になっているように思うんです。

大村　和男さん

「何ができるんだ？」って関心から“居場所”に関わりました。80歳も過ぎて役にたてるのかわからないけれど、山田先生や伴先生など先生方は行動的で常に一生懸命。学生たちも同様です。

今でも「どんな成果を目指して取り組むのか」については漠然としているものの、子どもたちの様子を見ていて思います。思いっきり遊べてない子どもたちと一緒にいろいろ遊ぶこと。勉強が好きじゃない子どもに好きになるきっかけをつくること。進学することに意欲がない子どもに夢を持てるようにすること。こんなことは、今の学校がなかなかできていないことで、“居場所”が、

団体の概要

ゆがわらっことつくる多世代の居場所

所在地	足柄下郡湯河原町中央3-2-11
WEB	https://www.facebook.com/yugawara.tasedainoibasho/
代表者	山田　貴子・坂倉　杏介・伴　英美子
開設年月日	2016年11月13日
活動日	無料 ※活動によって有料。詳しくはWEBを参照
助成金	子供の未来応援基金（子どもたちの学習支援事業）
協力・関係機関	湯河原町 慶應義塾大学SFC研究所

地域概況

湯河原町の人口と世帯　※平成30年7月1日現在（前月比）
人口：24,255人 (-25)
男：11,266人 (-8)　女：12,989人 (-17)
世帯：10,869世帯 (+8)

神奈川県の西南端に位置し、横浜から60km、東京から90kmの距離にある。町の北東部は小田原市、北西部は箱根町、東部は真鶴町、南西部は静岡県熱海市、西部は静岡県函南町に接している。

地域の染師のご指導で、古い提灯に絵付け。やっさ祭りで飾られました。

少なくとも子どもたちに働きかけていることだと。

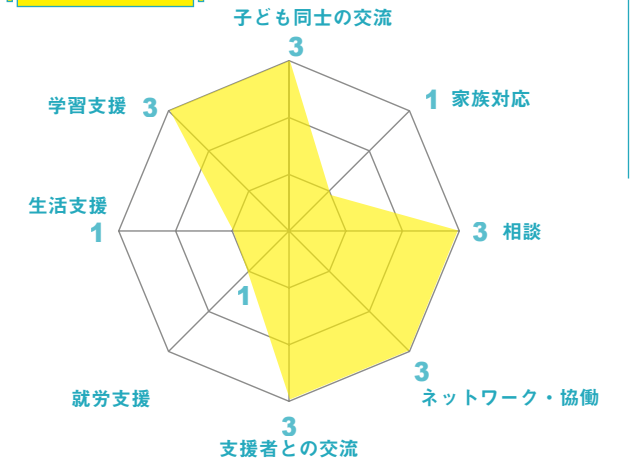
未完成だからいい！地域で創り続ける“居場所”

“居場所”の建物内をみても、“居場所”に関わる誰を見ても「未完成」。それがこの場の特徴とも思っています。

時代も子どもたちのニーズも日々、変化しています。だから、“居場所”だってそれに合わせて変化していかなければならないと思います。その時、その時、丁寧に社会を見て、子どもたちを見て、みんなで対話しながら“居場所”を創りたいと思います。

また、“居場所”で行うプログラムも“居場所”にいる子どもたち、地域の方々と一緒に、丁寧に話をしながら育てていきたいと思っています。“居場所”に関わりをもった子どもたちが10年後、大学生になったとき、この“居場所”に戻ってくることができるように、運営面でも持続可能な団体として自立していきたいと考えています。“自分の居場所”が町の中に在ることによって、生まれ育った町に愛着をもち、いつでも帰ってくることができる、そして、次の世代に可能性あふれる未来を繋いでいくことができるのではないかと考えています。今、“居場所”に来てくれている子どもたち、地域の方々とこれからの“居場所”の未来を創っていけることが楽しみです。

活動の自己評価



子ども同士の交流：子ども同士だけでなく、多世代交流の場。
家族対応：現在は来所する子どもの保護者との交流は少なく、今後、保護者にも居場所の活動に参加していただける仕組みを考えていきたい。
相　　談：子ども、若者、お年寄りが相互に相談したり、お互いのチャレンジを応援しあえる関係にある。
ネットワーク：町役場や町内で活動する人、団体と連携。

現状把握

- 限られた人間関係の中で、自分らしさを表出することをためらう子どもがいる。子ども達からの「子どもからお年寄りまで、多世代で安心して過ごせる場が欲しい」という声が設立につながった。
- 多様な世代と触れ合う機会が減少している。

効果把握

インプット：地域の現状

- 子どもたちは本音で言葉と時間を交わす場を求めている。
- 家庭により、子どもの学びや活動の機会に差がある。
- 神奈川県で最も高齢化率が高い（約4割）。
- 自然が豊かで、地元への愛着が深い人が多い。

アクティビティ：具体的な活動

- 構想から場所探し、リノベーションまで子どもからお年寄りまでの多世代が参加し「多世代の居場所」づくりを行う。
- 月10日程度開所。「ゆがわらっこ大学」と称し、英会話、スポーツ、実験、アート、絵本等様々な教室を開講。
- 多世代が共に学ぶ「多世代共創塾」、誰かのやってみたい企画を実現する「やって ME-BYO ラボ」、多世代で食事作りと食事をする「居場食堂」を開催。対話の機会を多く設ける。
- 大学生が中心となりイベントや学びの場を企画・運営。
- 町役場との連携。地域の活動への積極的な参加。

アウトプット：産出物

居場所創出事業
- 来所者数：
  2016年11月～2017年10月　1817名
  2017年11月～2018年10月　2200名（見込み）

学習支援事業（2018年4月から実施）
- 実施回数：2018年4月～4月　週2.6回。

アウトカム：活動成果

- 0歳児から80代までが来所している。
- 信頼し、応援し合える斜めの関係が構築されている。
- 多世代との触れ合いにより、子どものみならず、どの世代においても、ロールモデルや目標の獲得につながっている。
- 子ども達の自己肯定感・効力感、活動意欲の養成。

インパクト：生じた変化

- 子育て環境の魅力化
- 若者世代の挑戦・成長の場の構築
- 高齢者の生きがい創出

相談　居場所

09

セクシュアルマイノリティの若者に寄り添う
コミュニティスペース
SHIP にじいろキャビン

横浜市神奈川区

NPO法人 SHIP　代表

key person

星野 慎二さん（58歳）

SHIPが目指すもの

NPO 法人 SHIP は、セクシュアルマイノリティの人々が、自分らしく心身共に健康に暮らせる社会、多様性が尊重される社会の実現を目指し、さまざまな活動を行っている団体です。当事者への支援はもちろんのこと、県民・市民へ向けてセクシュアルマイノリティの理解を深めるための普及啓発活動にも積極的に取り組むなど、「同じ仲間とのつながり」「行政や教育機関とのつながり」「医療機関とのつながり」を進めています。

活動のきっかけ

私もセクシュアルマイノリティの１人です。2002（平成 14）年に任意団体を立ち上げ、ＨＩＶ予防啓発活動を始めました。自分と同じセクシュアルマイノリティの友人を病気や自死で失った経験から、当初は健康増進を主な目的に活動していました。

しかし、活動の過程で、ＨＩＶなどの感染症だけではなく、自己肯定感の低さ、うつ、引きこもり、自傷、自死など、セクシュアルマイノリティが抱えるさまざまな問題に気付くようになりました。また、2000（平成 12）年１月から２月にかけて発生した、東京都江東区でゲイを狙った暴行や殺人等の痛ましい事件からも、セクシュアルマイノリティの人権を守り、正しい理解を社会に広める必要性を強く感じさせられました。

これらの出来事を背景に、現在では臨床心理士によるカウンセリング、医療専門職による HIV 検査等、専門職とのネットワークを生かした心身の健康のサポートのほか、同じ仲間との出会いの場を提供するコミュニティスペースの運営、各種イベント、セミナーの開催、講演活動などの活動を広げています。交流会では、家族の会、支援者間の交流なども行っています。

行政や教育機関とのつながり－情報と支援を届きやすく

2007（平成 19）年、SHIP は神奈川県と「かながわボランタリー活動推進基金 21 協働事業」の協定を締結、2009（平成 21）年には県教育委員会教育局と協働事業の協定書を締結します。これらをきっかけに、公的機関や学校との関わりを広げていくことになります。

SHIP では、教育機関や行政などとつながりを作ることで、若者たちに必要な情報と支援が届きやすくするとともに、教職員、PTA などへのセクシュアルマイノリティの正しい理解を伝える活動を進めています。県の受託事業で交流会や相談会を開催する場合は、対象のエリアが広いため場所を固定化せず、県が相談者の事情などに応じて適当な公共施設などを手配します。

セクシュアルマイノリティに加えて、心身的、社会的なハンディのある、いわゆる“ダブルマイノリティ”の人には、普段利用している支援機関・施設内の一部屋を相談室として使用することで、関係性の取れた相談員も一緒に話をすることができます。

かつては、同性愛の話は学校ではタブーとして扱われ、啓発ポスターの掲示ができない、理解のある先生が掲示しても校長が剥がしてしまうといった時代がありました。現在は教育委員会との連携によって、ポスターを掲示してもらえるようになりました。学校に本が置かれたりポスターが貼られたりするだけで、学校が自分を認めてくれているという肯定感につながるんです。

また、教職員やＰＴＡからセクシュアルマイノリティの理解や人権をテーマにした研修の講師を依頼されることが増え、昨年だけでもその回数は 120 回を超えました。

「男らしく」「女らしく」に苦しむ若者たち

テレビではセクシュアルマイノリティのタレントが多く出演するようになった昨今。派手な服装や独特なしゃべり口調で視聴者を楽しませています。そうした動きが結果としてセクシュアルマイノリティの存在を世間に広めることになった影響か、セクシュアルマイノリティを取り巻く社会的な環境は以前に比べて大きく変わってきたと感じています。自らセクシュアルマイノリティであることを学校でオープンにする若者も出てきています。

しかし、それはほんの一例。社会の理解度の高まりを後ろ盾に、思い立って親にカミングアウトした結果、うまくいかなかったり、理解が得られなかったケースも未だあります。理解は着実に広がっていながらも、それは全体的なものではなく、まだ一部という現実を痛感させられます。

PROFILE

ご自身もセクシャルマイノリティ。友人が HIV で亡くなり、その経験から HIV の予防啓発に関心を持ち活動を始める。2002 年 12 月、性的マイノリティ支援のための任意団体「横浜 Cruise ネットワーク」を設立。2007 年 4 月～ 2012 年 3 月まで、神奈川県との協働事業により、セクシャルマイノリティのためのコミュニティセンター「かながわレインボーセンター SHIP」を開設。現在は「SHIP にじいろキャビン」を開設・運営する。2012 年 4 月～ 2013 年 3 月横須賀市人権施策推進会議委員。2015 年 1 月横浜弁護士会人権賞受賞。2018 年より神奈川県の委託で派遣相談なども実施。

セクシュアルマイノリティの人々の多くは、心身の発育が著しく多感な中学校や高校の思春期に、自らのセクシュアリティに気づきます。しかし、学校の中で正しい情報を得たり、相談ができずに独りで悩んでいたりする若者たちが多くいます。また、親や友人にも相談できず、周囲に嘘をつく後ろめたさに苛まれたり、結婚できない・子どもができないなどの不安を抱えています。その他、日常の生活の中でメディアなどによって刷り込まれていく嫌悪感によって、自分のセクシュアリティを否定的に捉えたり、考えないようにしたりする傾向があります。そんな若者たちを受け止める居場所となっているのがコミュニティスペース“SHIP にじいろキャビン”です。

SHIPにじいろキャビン

“SHIP にじいろキャビン（以下、SHIP）”は誰でも気軽に買い物帰りや学校帰り、仕事帰りにふらっと立ち寄って、本を読んだり、おしゃべりしたりできるサロン。毎週水・金・土・日曜日が開館日で、私を含め２～３名スタッフが日替わりで対応しています。

中には、フリースペースに４人掛けのテーブルとソファーが２つあり、自由に利用できるほか、全国で行われている LGBT 関連のイベント情報や、HIV・STD 関連の資料が取り揃えてあるインフォメーションコーナー、セクシュアルマイノリティ関連の書籍や雑誌がそろう図書コーナー、インターネットに接続できるパソコンコーナーがあります。

利用者は 20 代が約半数で、中学生、高校生を含む 10 代が約３割、残りの２割が他の年代となっています。こういった常設の居場所は全国的にはほとんどなく、あったとしても都市部などに偏っていたりするため、利用者は県内にとどまらず、東京、千葉、埼玉などの関東はもちろん、青森、大阪、福島などからも若者が訪れます。

若い子たちは身近にロールモデルがいないので、20 代は就職活動を始めるときや大学の卒業を控えている時期、10 代では進路を考えるときなど、将来を考える節目に訪れる若者が多いです。自分からはあまり声をかけないようにしています。思い思いに過ごしてもらい、声をかけられたら応じたり、相談に乗ったりしています。

若者が陥りやすい問題

セクシュアルマイノリティの人たちの約３割が、中学校で不登校を経験しています。この不登校がきっかけで生じてしまうのが「貧困」。不登校になると、多くが以降の学歴や就職活動に大きく影響してしまいます。

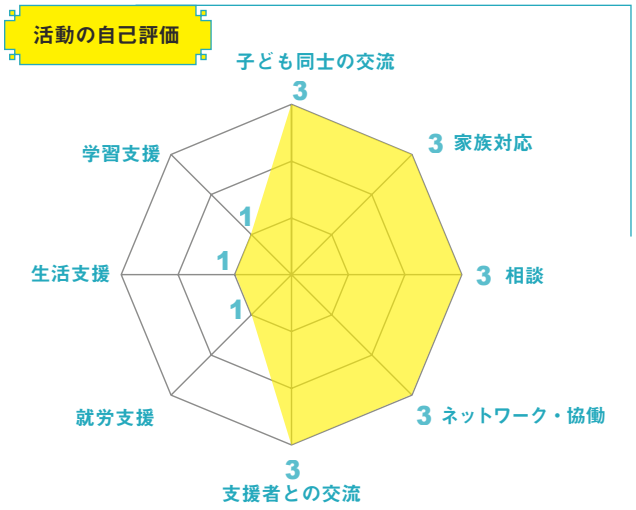
また、周囲との交流の機会が減ってしまうことによるコミュニケーションスキルの低下も、社会への復帰を難しくする大きな要因になっています。生活保護受給や路上生活が続くケースは決して珍しくありません。

SHIP では、これからもこのような問題に陥りやすい若者たちに寄り添い、サポートしていきます。そして、行政や教育機関、相談機関、医療機関等と連携しながら、サロンや交流会、講演活動などを通じて、セクシュアルマイノリティの若者たちとその家族を支援し、社会への普及啓発に取り組んでいきます。

セクシュアルマイノリティとは？

生物学的な体の性に対して、性の自己意識が一致しない人、恋愛、性愛の対象（性的指向）が同性や両性（男女両方）に向いている人などがいます。社会的には少数派となるそれらの人を「セクシュアルマイノリティ」といい、セクシュアルマイノリティのカテゴリーを表す言葉の一つに「LGBT」があります。

LGBTは、L（レズビアン：女性の同性愛者）、G（ゲイ：男性の同性愛者）、B（バイセクシャル：両性愛者）、T（トランスジェンダー：体と心の性が一致しないという感覚を持つ人）の略語です。これら以外にも、性愛的な関係を求めない無性愛者や、男女という形で性的な自認をしていないX（エックス）ジェンダーなど多様なセクシュアリティがあり、セクシュアルマイノリティは人口の３～５%（クラスに1から2人）程度いると言われています。



団体の概要

NPO法人　SHIP

所在地	横浜市神奈川区台町 7-2 ハイツ横浜 713 号室
TEL	045-306-6769
代表者	星野　慎二
開設年月日	2002 年 12 月（2012 年4月からNPO化、現在の名称に）
活動目的	セクシュアルマイノリティの人々が、自分らしく心身共に健康に暮らせる社会、多様性が尊重される社会の実現
活動日	毎週水・金・土曜日の午後4時～9時、日曜日の午後2時～6時（SHIP にじいろキャビン）
活動内容	コミュニティスペース「SHIP にじいろキャビン」の運営、交流会、各種イベント、セミナーの開催、HIV 予防啓発活動、カウンセリング、対面相談、電話相談「SHIP ほっとライン」、講演活動など多数
利用料金	300 円の寄付。ただし中学・高校（定時制・通信制を含む）在学者は無料（SHIP にじいろキャビン）

居場所　子ども食堂　地域交流　学習支援

10

だれもが力いっぱい生きていくために

川崎市ふれあい館

川崎市川崎区

（福）青丘社　事務局長

key person

三浦　知人さん（64歳）

PROFILE

大学時代から川崎市南部地区の在日コリアン等の人たちに関わり、民族差別をなくすための地域活動に参加し、社会福祉法人青丘社に入職。ふれあい館の職員、館長を務め、60歳で館長を定年となり、現在法人の事務局長。ふれあい館建て替えなどのために現在も奔走中。

“川崎市ふれあい館”のある地域

川崎区桜本地区は、在日コリアン等の人たちが生活を積み重ねてきた町です。“川崎市ふれあい館”（以下、ふれあい館）は、1974（昭和49）年に起きた大手企業の就職差別裁判をきっかけに、民族差別解消に向けた大韓教会の地域活動から始まりました。当時は戦後30年。民族差別の異議申し立ては、少ない社会でした。ようやく「差別される側がうつむいているのはおかしい、差別する側がいけない」という主張が出始めた頃です。

朝鮮半島から日本に来た在日コリアンの1世とは違い、2世や3世の人たちは日本で生まれ育ちました。2世は、子ども時代に「朝鮮に帰れ」と言われ、泥をかけられた経験をしています。2世が親となり「自分の子にはそんな思いをさせたくない」と考えるのは自然なことです。私たちは、そのような母親たちと一緒に活動をしてきました。

1974年の児童手当、公営住宅入居を求める地域集会

社会福祉法人 青丘社への関わり

1970年代、大学生だった私は、サークルの先輩に連れられ、よく分からないまま就職差別をした工場前でビラ配りをしました。在日コリアンのことを教えてくれたのも先輩です。

高度経済成長期の頃は、国籍条項があり、在日コリアン等の人たちは、児童手当や奨学金も受け取れず、就職差別がある時代でした。その中で子どもたちは「勉強したってしょうがない」とあきらめてしまいます。自分の未来を自ら切り開くことができない子どもの状況を知り、学生の私は、ショックを受けたのです。在日コリアンの母親たちは、自らが生きることと子どものために戦うことが一つでした。その生き方に感銘を受け、活動に関わることとなりました。

青丘社の活動から“ふれあい館”の建設へ

活動は、あきらめの境地にある当事者への投げかけから始まりました。「若い兄ちゃんがなんか言っているけど、のせられてたまるか」と言われましたが、止めることはしませんでした。当時は、社会福祉についても国籍条項があり、在日コリアン等の人たちは対象外となり、「社会的支援がないのなら、税金は納めない。自分たちで生きる」と思う彼らと地域住民との間に溝が生まれました。

地域活動の初期10年の活動は、子どもたちが本名を名乗れるように、行政に対して国籍条項の撤廃を求めていくものでした。そして、教育委員会に差別をなくす取り組みを求めるものでした。この活動が認められた頃から、在日コリアンの人たちの意識も「自分たちの意見を伝えれば、少しずつ変わる」と思えるようになったと感じます。“ふれあい館”建設には地域の反対運動もありましたが、人と人との交わりによって、少しずつ地域住民たちとの溝も埋まっていったように思います。

現在の“ふれあい館”

“ふれあい館”の活動は、社会参加型。みんなで課題を共有して解決していこうという動きをしています。今の社会状況は、若者支援、貧困支援などが求められています。かつての在日コリアン等の人たちのように、今は、全ての人が支え合わないと生きていけない時代になりました。国は地域共生社会の推進を進めています。子ども支援や、地域支援についても「教育・労働・社会政策」など、包括的な対応をしないと支えられません。政策の土台には、そこで生活する人が関わり合い、元気になるということでないといけないと考えています。

専門職による解決は、そもそも専門職がそこの地域で生きている人ではないので、支援者となってしまうのです。専門職は、往々にして「福祉は困難な部分を切り取って改善すれば幸せ」という考え方があるように思えますが、それは誤った考えです。

お金がなければ不幸とか、差別を受けると不幸であるという短絡的なことではありません。“ふれあい館”に集うおばあちゃんたちは、実にたくましい。彼女たちに比べて自分なんて生きる力のない青二才だと思っているし、実際に思われているんです（笑）。

“ふれあい館”の職員は、子どもや在日コリアン等の人たちと共にいること、そして、どれだけ共感を持てるのかを大切にしています。貧困支援、若者支援は空気感が大事です。“ふれあい館”には課題のある子どもが集まってきます。それは、ひとえにスタッフのまなざし、空気感があるからこそと思います。課題のある子がちゃんと集まって活動していることだけで「いいぞ、いいぞ、“ふれあい館”は間違っていないぞ」と確信するのです。

多文化こどもハロハロクラブでは、日本だけでなくさまざまな国にルーツのある子が集まり、学校の宿題やさまざまな国の遊びを行っています。

鈴木　健さん（43歳）

PROFILE

母方の祖母は日本人。祖父は朝鮮人。二人は日本で出会い、朝鮮へ渡り母親が生まれ、そして日本へ。今の言い方では、コリアンルーツのコリアンダブル。10代の頃にフィリピンの人たちと出会い、時間を共に過ごす中でタガログ語を自然に覚え、相談対応も自然にしていたという経歴の持ち主。

“ふれあい館”に関わるきっかけ

“ふれあい館”に勤めて6年になります。それ以前は「カラカサン」というフィリピン当事者グループの支援をしていました。桜本地区にはフィリピン人の人がたくさん生活していて、三浦さんが、タガログ語を話せる僕に、フィリピン人の保育園に通う子どもたちや保護者の困りごとに対応の手伝いをして欲しいと頼まれたのが“ふれあい館”で仕事を始めたきっかけです。

“ふれあい館”と地域

川崎は労働者の町。いろいろな出身の人が集まって来る町です。韓国人が日本に暮らしを求めて移り住むようになったのは戦時中に遡りますが、京浜工業地帯ができてからは沖縄の主に女性たちが紡績工場で働くようになったり、高度経済成長期には東北から出稼ぎに来る方も増えました。また、1990年代にはフィリピンからも働く場を求めて川崎にあつまりました。

“ふれあい館”は“社会教育施設・コミュニティセンター”と“子ども文化センター（児童館）”の2つの看板を持っています。児童館は主に日本人の子どもたちが多く利用していますが、社会教育施設・コミュニティセンターは、子どもから高齢者まで、幅広い世代が交流する、差別のない地域づくりを目指して活動しています。

“ふれあい館”建設当時は、建設自体に強い地域の反対運動があり、住民の中に差別意識も強い状況でした。差別意識は、家庭の中での親の意識や言動によって知らず知らず、子どもの中にも育っていくものです。そういう問題を防いだり改善するためには学校で歴史を学び文化を知ることが大切です。“ふれあい館”でも、子どもたちがチャンゴ（朝鮮半島の打楽器）に興味を示してみんなで叩きます。チャンゴの演奏を楽しんで育った子どもが大人になり親になるとき、その家庭には差別意識がなくなり、社会は変わっていきます。

かつて“ふれあい館”建設反対運動をしていた、今は高齢になった方に、「あの時はすまなかったね」「今は、“ふれあい館”があってにぎやかでよかった」と言われることがあるんです。

地域の高校生への支援

“ふれあい館”では40数年前より中学生の学習支援をしていました。でも子どもが高校生になると支援が途切れてしまいます。「高校生に対しても何らかの支援が必要なのでは？」僕がそう思うようになったのは、以前仕事をしていた「カラカサン」での体験からです。

フィリピン人のシングルマザーとその子どもの支援団体「カラカサン」の子どもの支援対象年齢は高校入学まででしたが、当時、仕事帰りに川崎の繁華街を歩いているとカラカサンで支援していた子どもたちが、高校を退学して働いていたり、中には風俗で働いているなどの情報を聞くこともありました。そんな時「カラカサン」の活動はなんだったのかと無力感にさいなまれることもありました。

「なんとか高校生への支援を」と考えて僕が役所に相談した頃、川崎市生活保護・自立支援室の職員が川崎市立川崎高校を訪問しており、「高校生カフェ」の立ち上げに話が進みました

定時制高校の「ぽちっとカフェ」

今、川崎市立川崎高校で学校カフェを週に一度、金曜に行っています。川崎高校は、昼間部・夜間部のある定時制高校です。カ

団体の概要

社会福祉法人 青丘社 川崎市ふれあい館

所在地	川崎市川崎区桜本1-5-6
TEL	044-276-4800
WEB	http://www.seikyu-sha.com/
代表者	田 貞桃（チョン チョンド）
活動内容	児童館、中高生の学習支援と居場所づくり、若者からお年寄りまでのサークル活動の支援と日常生活の相談事業など多数。
開設年月日	1988（平成元）年6月
利用時間	毎日 午前9時30分～午後9時 ただし日・祝日は午後6時まで
利用人数	71,241名（2017年度実績）

フェには、学生350名のうち70名から100名がカフェに訪れジュースやお菓子が並んだテーブルを囲んでおしゃべりしたり、ゲームをしたり過ごし方は自由。学年を超えた生徒同士の交流をしています。

僕たち常駐スタッフは何気なく生徒たちを見守っているのですが、生徒たちは、家のことなどもよく話してくれます。

子どもの貧困対策法では、学校をプラットホームにと言われていますが、教育と福祉は縦割りで、財源も同様の傾向があります。その中、福祉予算で2年間実施し、実績を上げて学校から認めれる存在になりました。その後、教育関係からの予算に変わり「生徒自立支援業務」として3年経過しています。

小学生への支援

夏の夜のプログラム

“ふれあい館”の児童館は、子どもが自由に来て遊びます。子どもたちはスタッフと関係ができると自分のこと、家のこと、困っていること、居場所がないこと、なんでも話してくれます。

6年前、“ふれあい館”に入職したころ、三浦さんに「とりあえず、館内をうろうろしていて」ってよく言われていました（笑）。うろうろしていると見えてくるわけです。桜本の子どもが。個別にしっかり受け止める必要のある子どもの存在にも気づきます。

子どもの居場所は、気兼ねなく自由に来られるオープンスペースも魅力だけど、多様な課題を抱えている子どもを受け止められる場であることも大切。子どもの抱える課題に対応するには家族との関係もなければ難しいこともあります。家庭との接点も作りたい。そんな思いから、家庭環境を含め、複雑な背景のある小学生の子どもを対象にした「小学生の夏の夜のプログラム」を4年前に始めました。夏休みに週1回夕方6時から夜9時まで。申し込み制で1回300円。プログラムは、大焼肉大会、夜のドライブ、花火大会、さまざまです。

こんなことがあります。子どもは参加したいと思っていても、親は「ダメ」という場合は、間に入り、やり取りします。プログラムの終わりは子どもたちを自宅まで一人一人送り届けますが、「夜、久しぶりにのんびりお酒が飲めた。ありがとう」と嬉しそうな顔でお礼を言われたこともあります。

子どもたちの本当の居場所とは

このプログラムは、僕やほかのスタッフが直接子どもに案内をして、家庭ともコンタクトをとりながら行っています。スタッフは高校生10人を含む20人。スタッフとして、“ふれあい館”を利用していた子どもたちも手伝ってくれます。

学習支援を受けていた中学生が高校生になり、「小学生や中学生を支えてくれよ」と声をかけると、夏の夜のプログラムや学習支援、子ども食堂も手伝ってくれて、その経験が高校生たちを成長させてくれます。“ふれあい館”では、こういう循環ができているのです。スタッフとして高校生が小・中学生に関わるようになると、自分の人生を大きなところから見られるようになり、自分に起こったことは何だったのか、と客観的に見れるようになります。

2015（平成27）年に多摩川の河川敷で中学生の殺人事件が起こりました。負の循環の引力は強くて、坂を転がり始めると支え切れないほど加速してしまいます。大人が「頑張って」と子どもにいうことだけでは変わっていくものではなく、地域で「それでも生きていけるんだ」という空気や、よい循環の中でしか支えられないと思っています。

4、5年前に、生活保護世帯の子どものアルバイトが将来に向けての貯蓄として認められるようになりました。“ふれあい館”では、中学生の学習支援や小学生向けの支援を有償のボランティアとして、高校生に声をかけ、子どもたちが大学生となる自分の未来のために貯蓄していくことを、福祉事務所や家族と調整しながらサポートしています。高校生が“夏の夜のプログラム”などで小学生や中学生を支えることは、高校生自身が生きる意味を感じること、生きること、につながっているのです。

ふれあい館の居場所づくり

“子どもの夏のプログラム”は夏休みの間に限定され、十分ではないため、“ふれあい館”では、子ども食堂を2016年（平成28）年の夏にスタートしました。子ども食堂は、困難な状況にある子どもたちだけではなく、「地域のもう一つの食卓」をコンセプトにしています。ここにも普段から顔見知りの高校生がボランティアで関わり、小学生も喜んでくれています。さらに、常連の小学生がホールスタッフとして活動してくれるようにもなりました。

子どもや若者の居場所づくりは、小学生、中学生、高校生という枠ではなく、「具体的な目前の顔とともに生きていく」ことがこだわりであり、大切にしたいと思っています。

人生の過程で居場所を失ったり、しんどくなることはいつの時代でも、誰にでも起こりうることで、小・中学生時代だけを支えていればよいわけでありません。児童館だけでなく、地域の中でいろいろな人生のステージに合った場づくりや、家族とも付き合うことで、子ども若者の育ちを支えられるのではないかと思っています。

関係機関との連携

“夏の夜のプログラム”の1年目は、僕自身が対応している子どもに声を掛けましたが、今は、各現場のスタッフから気になる子どもに声掛けをしています。そうしていくと、現

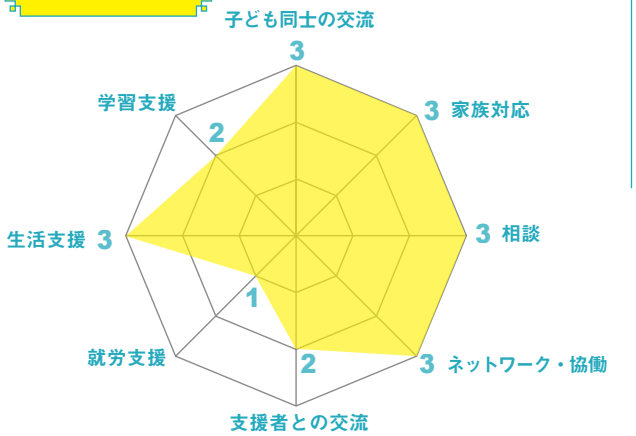
「いっしょに食べて、いっしょに笑って、共に生きる、もうひとつのおうち」
桜本こども食堂

場のスタッフも変わっていきます。

子どもや若者を支援する場がたくさんあると、「場」がハブになって、関係機関をつないでいきます。福祉の制度では対象とできない課題であっても、居場所で受け止めることで子どもの生活が変わっていきます。たくさんの世代と関わり、たくさんの関係機関の職員と関わることで、対応できるようになるんです。関係機関の職員としても、どうにもならないところは、“ふれあい館”に手伝ってもらえる、と思うと安心して動けるようです。“ふれあい館”の職員だけでやろうとすると潰れてしまいます。関係機関に一度は「ここをお願いします」と伝え、対応が難しければ“ふれあい館”で行う場合もあります。とにかく一緒に汗をかくこと。そうすると、一緒に泣いて、笑うことができるんです。

“ふれあい館”では、活動を広げて「場」を次々と作ってきました。次は、「担い手」づくりだと思っています。また、「場」は大切だけど、日常生活や地域の中で子どもが生きていけるために「地域づくり」が次のステップだと考えています。どうしていけばいいのかが課題です。

活動の自己評価



子ども本人への対応だけではなく、家族も含め生活支援や相談対応を実施している。子ども同士の交流は、小学生などへの支援に高校生が関わることで、交流だけでなくロールモデルとしての意味合いも持つ。ネットワーク・協働は、ふれあい館の特長であり、市役所・区役所、教育委員会、児童相談所などの行政機関、地域の小学校、中学校、高校、病院や地域の街づくり協議会、近隣商店街など多くの機関と連携・協働し、事業実施や個別の相談対応など多くの場面で行われている。

現状把握

以前、在日コリアン等の人々は、支え合いながらでないと生きていけない時代であったが、現在は、貧困や孤立など、すべての人々が支え合わないと生きていけない時代となっている。

効果把握

インプット 地域の現状

不登校、親の労働環境などから夜間を含めた子どもの居場所の課題、高校中退した子どもたちが繁華街でアルバイトをしたり、行き場のない子がふれあい館にふらっと遊びに来る。

アクティビティ 具体的な活動

・高校生を対象としたキャンプの実施、高校内でのカフェの実施。
・中学生の学習支援、小学生の夏休みプログラムなどで高校生は有償ボランティアとして活動。

アウトプット 産出物

・高校生カフェ「ぽちっとカフェ」の運営
・小学生の「夏の夜のプログラム」実施
・「桜本子ども食堂」の実施

アウトカム 活動成果

支援を受けていた子どもが高校生となり、小中学生を支援することで、自分に起きたことを客観視でき、成長できる循環が出来ている。

インパクト 生じた変化

・児童館だけでなく、地域の中で人生のステージごとの居場所が出来てきている。
・居場所づくりと家族とも関係性を持つことで子ども若者の育ちを支えている。
・活動として居場所づくりから「地域づくり」が次のステップ。

若者交流

11 若い主人公をまちに増やしたい NPOインターンシップ 横浜サンタプロジェクト

横浜市中区

NPO法人アクションポート横浜　代表理事

key person

高城 芳之さん （36歳）

アクションポート横浜について

アクションポート横浜は、企業や大学、行政などの多様なセクターを繋ぐことを目的に2008（平成20）年に立ち上げた団体です。現在は「まちにたくさんの主人公を！」というキャッチコピーの元、さまざまな事業を展開しています。大学生がNPOでインターンシップをする“NPOインターンシップ”、横浜の企業との協働で企画・実施する“横浜サンタプロジェクト”は、アクションポート横浜の取り組みの柱になっています。

自分たちなりのやるべきことは何か

法人として、2018（平成30）年7月から新体制になり、この10年のつながりや活動を生かして、「自分たちのやりたいこと、やるべきことは何か？」と改めて問い直し、「次世代を担う若い人を社会課題に取り組むNPOとつなげる」という目標を新たに再出発しました。

社会では、さまざまな人や組織が、社会に影響を及ぼす活動を行なっていますが、若い人たちの参画は十分とは言えません。若い人たちに社会への関心を促し、次世代へつなげようとする行動を、NPOや企業など、さまざまな組織と共に行うことができたら、この先も「新しい価値」が生み出せ続ける社会になるのではないかと考えたのです。

若い人たちに社会との接点を持つきっかけづくりを

今から約15年前、ボランティア情報は大学のボランティアセンターや、サークルに入らないと得られませんでしたが、現在はネットで簡単に調べられます。NPOで活動をしたい人は、自分で調べてNPOに飛び込むことが容易です。

しかし、ボランティア活動に関心を持つきっかけのない学生は、全体の4割～5割と言われており、学生とボランティア活動をつなぐ仕組みづくりの必要性を感じていました。「ボランティア活動が履修単位になるから」「友人が活動しているから」「面白そうだから」きっかけはなんでも良いです。学生時代に大学だけではない居場所や関係を持ち、豊かな経験を得ることができた人は、将来、民間の企業に就職してからも、週末はNPOで活動するかもしれません。そんな人が増えていけば、社会に変化をもたらすことができると思います。

大学生とNPOがつながる“NPOインターンシップ”

NPOインターンシップの体制づくり

今、つながりのある各大学と連携し「NPOとは何か、企業との違いはどんなところか」等、話をさせていただいています。講義後、学生たちの関心によって、NPOでのインターンシップ先が選択できるように、さまざまな活動やミッションを持つNPOを紹介し、理解を促します。更に、NPOと学生との迅速かつ適正なマッチングをするため、インターン先の分野に偏りがないように調整したり、年間計画の作成、ウェブサイトから容易にエントリーができる体制づくりなどを行いました。社会課題に取り組むNPOが門戸を広く開け、さまざまな人と協働するチャンスを持つことによって、NPOの組織力向上につながることも期待したいと思っています。

プログラムに参加する学生像

現在、10の大学と連携、25のNPOへのインターンシップ派遣が行われています。活動の内訳としては、夏休みを中心に短期プログラムに参加する学生が9割、長期プログラムへの参加学生が1割程度です。

インターンシップを経験した学生アンケートには、

・大学では得られない人間関係を持つことができた

・自分が何かの役に立てているという実感が持てた

など、承認された嬉しさや自己有用感が持てるなどの感想が寄せられます。

若者との接点はNPOの成長につながる

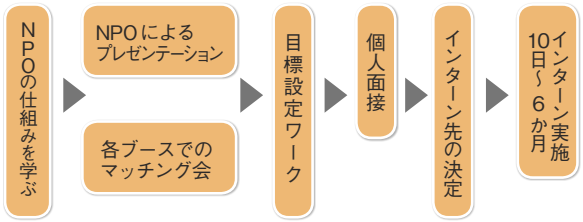
昨年は、学生たちが活動するNPOを選ぶイベント（お見合い会）を経て、マッチングした学生は83名でした。こうしたイベントは、学生にとって有意義なものですが、学生の前でプレゼンテーションをするNPOにとっても重要な場だと思っています。想いをもって、社会課題を解決していこうとするNPOの姿勢を学生に知ってもらい、活動に魅力を感じてもらえるようにするにはどうしたら良いか。多くのNPOが工夫をしてプレゼンに取り組んでいます。

PROFILE

1982 年生まれ。大学時代から「若者と地域をつなぐ場づくり」をテーマに活動をはじめ、新卒で NPO の世界に飛び込む。 当法人では学生のボランティアマネジメントを始め、企業の CSR 相談事業、プロボノ支援事業などを企画運営してきた。認定 NPO 法人 CFF ジャパン理事、NPO 法人くみんネットワークとつか理事、明治学院大学社会学部 非常勤講師など。

現在は約 1000 人のサンタたちが毎年活動している

NPO インターンシップの流れ



人気のあるインターン先は、年度にもよりますが、主にコミュニティカフェや子ども関係、国際 NGO です。希望者が多い場合は、エントリーシートを見て、熱意があるか電話で何度も確認します。時には、NPO に説得して受け入れを増やしてもらうこともあります。NPO 側としても、ボランティア受け入れ体制を整備することによって、事務局職員が仕事をしやすくなるなど、組織に動きが生まれているようです。学生は４年で入れ替わるので、それを前提にマネジメントをする必要がありますが、彼らを受け入れられるということは、色々な人材（世代）を受け入れられるようになるのではないでしょうか。

受け入れのノウハウについては、私たちも、一層バックアップしたいと思っていますし、NPO 同士でも困ったときに相談し合える横のつながりを作ることも重要と考えています。

「みんなが笑顔」のまちにする“横浜サンタプロジェクト”

もう一つの柱である“横浜サンタプロジェクト”は、NPO だけではなく、企業も含めた、より多様な組織や団体と協働して企画・実施する大イベントです。「横浜に笑顔をプレゼント」をキャッチコピーに、柔軟な発想を生かして 10 年間続いています。

CSR活動の相談から

始まったきっかけは、ある企業からの相談です。「地域の児童養護施設にサンタの姿で訪問してみたけれど、１社だけでは活動に広がりがない。活動を続けるためにはどうしたらいいか」という内容でした。そこで「他にも関心をもって取り組んでくれる企業や団体などがいるので、呼びかけてみないか」と提案し、特技をもったボランティアを含め、100 人のサンタを集めることができました。

サンタプロジェクトのメンバーは企業の職員・NPO の職員・学生などです。月１回の委員会で、企画を練り、熱のこもった話し合いの中で、さまざまなアイディアが共有され、プログラムが生み出されます。イベントを実現するために「当日の参加はできる」とか「イベントの周知をするための広報はできる」など、関わる人や組織の強みを活かしてプロジェクトが進められるようになってきました。

サンタが訪れる場所・活動の広がり

養護学校に訪問した帰りには、サンタたちの皆が、「また来たい！」という気持ちになります。「子どもたちのために」と思って訪れたはずが、逆に子どもたちから笑顔をもらい、サンタも笑顔になれたのです。それからは、プロジェクトで施設や養護学校などを知るため、そこで働く職員さんの協力を得て勉強会を開くなどし、子ども達のこと、ボランティアに何が求められるかなど、事前に理解を深め、活動にフィードバックするようになりました。次第に、養護学校の子どもたちも自らサンタとして参加するようになり、活動にも広がりが出てきました。このプロジェクトの醍醐味は、どんなに偉い肩書の人でも、サンタになると同じ人間だということ。立場や世代を超えて、皆を笑顔にするという目的を共有して、行動する、そんな一体感があります。

団体の概要

NPO法人 アクションポート横浜

所在地	横浜市中区山下町 94 横浜中華街パーキング協同組合内
TEL	045-662-4395
WEB	http://actionport-yokohama.org/
代表者	高城 芳之
活動内容	次世代を担う若者と社会課題に取り組む NPO を結び付ける
開設年月日	2008 年９月
活動日	毎週月～金　10:00 ～ 18:00
組織体制	常勤１名 非常勤４名 学生スタッフ１名（2018 年９月現在）

地域活動の魅力を伝えるNPOになる！

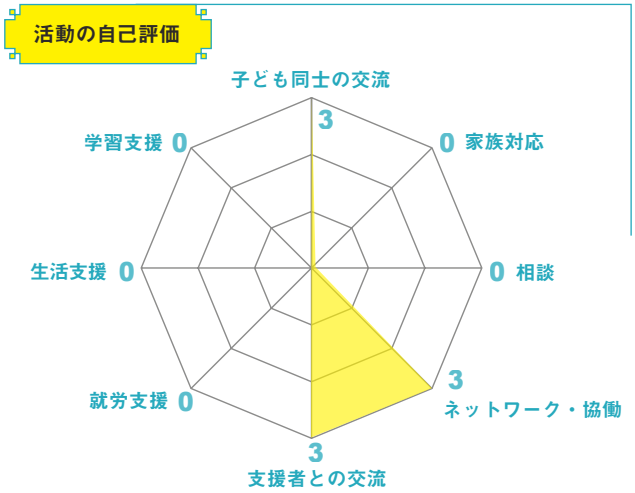
私が大学生の頃、個別支援級の子どもたちと遊ぶ学生サークルの活動をしていました。そのうち、地域の他団体からも「うちに来て」と声がかかり、学生と団体の交流会を企画するなどして、学生と団体のマッチングを図りました。でも残念ながら、人間関係ができていない中で、ボランティアをマッチングしても一回で終わってしまう。関係性を作らなければ長続きしないと気づき、つなぐ活動に関心をもったことが、新卒で NPO に就職したきっかけです。

中間支援の NPO で働き始めてからも「NPO 側も発信するメッセージが直球過ぎて、いきなり高いレベルの理解を学生に求めてやしないか…」「若い人たちの社会や NPO への関心を持ち、活動をしてみたいと思ってもらうために、何が必要か」を考え続けました。

今、NPO がすべきことは、NPO 自身も、若い人に関心を持つこと。また、NPO というコミュニティが魅力的であり続ける必要があると思っています。

NPO 活動に参加を促すことは、今も難しいことが多いと感じています。私は、スキルのある人だけを拾うスキルマッチングよりも、「だれもこぼさずにどう高めていくか」に関心を持っています。なぜなら、地域は特別な人のみで構成されるのではなく、どんな人でも自然に存在できるようなコミュニティである必要があるからです。

アクションポートの事務所がある中華街で行ったイベント



支援者と若者を隔てておらず、対話を重視し、企業、学生ボランティアとの交流を多くしている。相談窓口があるわけではないが、事前に困りごとや事情を聞いてプロジェクトの企画が生まれることもある。

共に考え、行動する「育ちあい」の促進を

アクションポート横浜の一番の特徴は、大学生たちが、自ら関わって企画していることです。自分が社会に対して感じた違和感や思いをどのように仲間と共有し、改善していくのか。実現には、何が障壁となっているのか。考え、行動することがどれだけ大変なのかを体感してもらいます。企画と実践は、経験の場です。正解を求めることが一番ではなく、選択肢がたくさんあるということを仲間と共に気づくことが大切だと思っています。

NPO に若者が増えるとその周りにも若い人が増える、NPO に変化が起こると周りのまちも変わっていく。その循環を生み出したいと思います。具体的なものがないと人はつながれないし、１つの組織だけではなかなかできない。だからこそ、我々中間支援組織がそれを促進する役割があると思っています。

嬉しいのは、卒業生が頑張って支えてくれていることです。活動の多くが卒業生の関わりで運営できています。それに 10 年継続していると 20 歳だった子が 30 歳になっていて、地域で子育てをしていたり、企業で働き、寄付をしてくれたり、遊びに来てくれたりします。彼らをお客様にすることなく、彼ら自身の多様な関係性が育つことを常に意識してやっていて、一方的な支援ではなく、育ち合いにつながっていくことを大切にしています。

長浜 宏海さん　学生スタッフ

アクションポート横浜には、色々な関わり方の人がいます。例えて言えば、いつでもどこからでもどんな風にでも参加できる“プール”のような場です。それぞれのプロジェクトで会う人も異なるので、私自身は、臨機応変さが身についたかなと思います。

４年生の今は就職先も決まり、学生スタッフとして週２回程、イベントの準備や司会などを担当しています。参加するインターンシップの学生たちは、最初は右も左も分からず不安だと思うので、できるだけ堂々として“場の空気を作りにいこう”ということを心掛けています。この活動を通じて、仕事自体を楽しんでいるさまざまな大人の姿を見ることができました。卒業したら、ベンチャー精神をもって、このような大人をたくさん生み出すことに関わっていけたらいいなと思っています。

編集後記

「子ども･若者の居場所づくり事例集」、２号目の取材でも、さまざまな出会いがありました。

子育て主婦、大手企業のキャリアウーマン、ボランティア活動好き学生だった若者、福祉に関心を持っていた人ばかりではありません。しかし、自分の生活の中から社会を、子どもや若者を深く、広い眼差しで観ています。そして、観たこと、気づいたことを身近な人と共有しています。そして､ごくごく小さなコミュニケーションから「何かできるかもしれない」「こんな取り組みがあったらいいね」と発展しています。

今日、住民主体の福祉の推進が期待されていますが、容易には進みません。地域社会や政治への関心の低さ、人間関係の希薄化、要因とされることは、改善が難しいことばかりです。しかし、取材中の出会いの中で、私たちは大きな希望を感じます。

混とんとした社会､地域のそこここに､小さくとも豊かなコミュニケーションが､イノベーションを起こしていることに気づくからです。

イノベーター―たちの笑顔、子どもたちの笑顔を是非、ご覧ください。

お知らせとお願い

子ども・若者にとっての居場所がいかに大切なものなのかを広く社会に発信していくこと、そして身近なところで具体的な活動が広がっていくことを目指し、県の取り組みとも連携を図りながら、「子ども・若者の居場所づくり」をテーマに、ガイドや事例集の発行、フォーラムの開催を行っていきます。

今後の予定

2018年11月20日　第3回フォーラム開催
2019年3月　ガイドVol.3発行

このガイドを読まれた感想、子ども・若者の居場所づくりの取り組みについて共有したい課題、活動に取り組んで気が付いたこと、身近なところで活動しているグループ等の紹介など、下記まで情報をお寄せください。

Ｅメール :ibasyo@knsyk.jp

〈お問合せ〉社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会　企画調整・情報提供担当
TEL 045-311-1423　FAX 045-312-6302　URL http://www.knsyk.jp/

KANAGAWA CASE BOOK 2018
子ども・若者の居場所づくり事例集

企画・取材・編集　NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会
デザイン・DTP　NPO 法人 よこはま地域福祉研究センター
取材協力　鯛ヶ崎公園プレイパーク事務局／あつぎえんぴつの会／フリースペースたんぽぽ／淵野辺つばめ塾・相模原みのり塾／
認定 NPO 法人 ぐらすかわさき／ずし子ども０円食堂プロジェクト／就労支援センター働楽／
ゆがわらっことつくる多世代の居場所／ NPO 法人 SHIP ／社会福祉法人 青丘社 川崎市ふれあい館／
NPO 法人 アクションポート横浜

協力　社会福祉法人 神奈川県共同募金会
発行日　2018 年 11 月 20 日
発行者　社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会

この冊子は、赤い羽根共同募金の配分金により作成されました。

子ども・若者の居場所づくり事例集

KANAGAWA CASE BOOK 2018